
宙は白銀に輝きて

となりの山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宙は白銀に輝きて

【Nコード】

N7632P

【作者名】

となりの山田

【あらすじ】

遙かなる未来、宇宙に進出した人類は自由惑星同盟と銀河帝国の二大勢力に別れ150年間にも及ぶ戦いを繰り返していた。

この物語はそんな混沌とした時代に転生した一人の少女の物語らしい

この作品は銀河英雄伝説の二次創作です。

なおこの作品を読もうと思った方は作者が作者なので本来は読む価値の無い駄文だと言うことを事前に把握して置いてください。

序章 テンプレ乙（前書き）

読者の皆様、初めましてあるいはこんにちは。

作者のとなりの山田と申します。

銀英伝のOVA見てたら急に女の子を出したくなったので出してみました。

悪気は無かったんです

ほんの出来心だったんです。

ですから読者の皆様

どうか命だけは、命だけはお助けくだされ

序章 テンプレ乙

『「ごめん、フレデリカ・・・ごめん、ユリアン・・・ごめん、みんな・・・」宇宙暦800年6月1日ヤン・ウェンリーの呼吸は3歳で停止した・・・。』

201X年12月24日 富山県富山市

「ヤーン・・・」

クリスマススイブ真っ只中のこの日、パソコンの画面越しにて、一人の青年が絶叫していた。

青年の名は栗林要。

どこにでもいる普通の高校生だ。

趣味はSTGと昼寝とアニメ。

暇さえあれば昼寝をしているかPCの前にいるかのどちらかの生活を続けていた。

そういうニートの様な性格であったためか、世間ではクリスマスイブなので恋人を持つリア充共がイチャイチャしているのに、彼には一切そのような浮いた話は無かった。

特に最近、ネットの動画巡りをしていた時にたまたま見つけた『銀英伝』に嵌っていたりする。

で、現在主人公の一人であるヤンが死んだことに絶叫している所だった。

「何でここでヤンが死ぬん!? しかもなんかユリアンがチャッカリあと継いじゃってるし? もう意味わからねえ!」

そう怒鳴ると要はパソコンのスイッチを切った。

6時間以上もパソコンの前にいるとさすがに目がチカチカしてしょうがない。

ふと外を見ると、小雪がちらついていた。

「雪・・・か」

（そう言えば今日はクリスマスイブだったな・・・）

クリスマスイブ・・・それは全国のもてない男たちが共通して涙を流す日でもある。

要もその例に漏れず涙を流していた。

「あれ、何で俺は泣いているんだ？何でこんなにも悲しいんだ？何でこんなにも誰かのぬくもりが欲しいんだ？」

こんな感じでダークサイドへと真っ逆さまに落下していると、

『要ー、ちよつと買い物行つて来てくれない？』

と言う母の声が聞こえた。

「今晚何？ケーキとか出る？」

「何言ってるの？餃子って言ってたじゃない？」

・・・クリスマスイブの片鱗すらないメニニューだった。

（クソッなんでこんな日に外出なんてしなきゃならないんだ！）

要は悪態をつきながら、近所のジャ○コに向かった。

ジャス○について、目的の物を買ひ、書店で立ち読みした後外にでると、外の雪は既に吹雪に変わっていた。

（寒！外メツチャ寒！早よ帰って紅茶の見ながら続き見よ）

と、ブランデー入りの紅茶と先月買ったばかりのPCを頭に浮かべた瞬間

要はスリップして自分めがけて突っ込んでくるトラックの姿が目映ったと同時に、強い衝撃を感じたのを最後に意識を手放した。

目を覚ますと、要は川の側にいた。

「んー、なんか変な気分・・・ってここドコ？」

皆様こんにちは、栗林要です。

なんかトラックに跳ねられて（？）気が付いたら川の側にいました。
多分、俺は死んだのだと思います。orz

でも死んだってことは常識的に考えてここは、三途の川であつて
よな？

と、言うことは・・・ロリな閻魔とか巨乳の死神とか出て来ないか
な？

ハアハア・・・

「こら、そんな気色の悪い顔せんと早く船に乗ってくれ、周りの迷
惑や」

あちこち見て回っていたら渡し守していた死神から注意された。

成程、川原で石を積んでいる子供や鬼がドン引きしていた。

サーセンww

取り敢えず船賃としていつの間にか腰についていた財布から有り金
を全部出して（と言っても6文だけ）渡し場に繋がれていた小船に
乗り込む

船には俺と死神さんのほかには誰もいなかった。

「死神さん」

『なんだ？命乞いなら受けつけへんで』

「そうじゃなくて、今日死んだのってもしかして俺一人なんですか？」

『いんや、でも今日は兄ちゃんて最後やな。まだ若いのに大変やっ
たなあ・・・俺にも娘がいるンやけどな・・・』

と言った感じで死神さんと世間話してたら知らん間に向こう岸についてしまった。

彼岸の閻魔庁はまるで中国の建物みたいな立派なものだった。

『じゃあ、さっきも話した思うけど今日は兄ちゃんて最後やから閻魔様の裁判すぐ受けられるさけ、頑張って来いや』

と、死神さんから励ましの言葉を貰うと、俺は閻魔大王のいる所に向かった。

side 閻魔

ふう、やっと今日の裁判も終わったよ、後は家帰るだけだな。もうすぐ娘の受験だから、今の時期は複雑だから出来るだけ家には早く帰らないとな

ああ、でも60年前の戦争の時よりはずっとマシか、あの時は辛かったな。

お互い仕事が多かったから帰ってもあの人は家にいなかったし、朝

起きて娘と会ったら娘はオバチャン誰？って言ったし・・・グスンッ

『あのー、すいません』

「何だよ・・・ってんん!？」

われに返ると目の前に少年が立っていた。

もしかして一人残ってた？

でも確か今日死ぬ予定の奴ってもう終わったはずじゃ・・・
え？ちよっと待てよ・・・

「あの、君の名前は？」

『えっと、栗林要です』

栗林要？そんな奴今日の死者リストにあったかな？

「ちよっと待ってね？すぐ終わるから」

そう言って私は閻魔帳を覗く

えーっと、k・・・栗林・・・あった、って死亡予定日は2090
年の12月24日！？早すぎじゃあ

くそ、生者管理局のやつらめ、またしくじりやがったな

何時も何時も人口爆発とやらの仕業にしがたってえ

おまけに今度はPCにデータ写し間違えて死んでるのか生きてるの
かはつきりしない奴が増えるし・・・

お陰で天国行きの手続きが大変なんだよなあ

更迭しようにもあいつらのバックには最高神様がいるしなア

下手すればまたただの地蔵に逆戻りになってしまうし

ああ、娘の私立受験の費用がァー

「ハア・・・あー、君、栗林君だっけ？残念だけど君どうやら間違
って死んじゃったみたいだ」

『へ？あのちよつとそれってどう言うことですか？』

「最近そういうのが妙に増えてるんだよ」

『ちよつと待て、良くあることってどういう事だよ！？俺が死んだ
のも良くあることなのか！』

「そう、良くある事。だからマニュアルではお詫びとして天国行き
になってるんだけど正直手続きが面倒くさくってさあ、だから私が
適当に選んだ空き容量が結構在る異世界に転生してね？それから、
分かってると思うけどチート能力とかそんなん一切無いから。」

『え？ちよ、おま・・・ってアーツ！！』

「ああそうそう、君の転生先は銀英伝の世界にしとくから思いっき
り活躍してねー！！」

と言う閻魔の言葉を聴きながら要は突然ぽっかりと地面に開いた穴
のそこへと落ちて言った・・・。

序章 テンプレ乙（後書き）

本作の設定

TSモノです。

主人公は何所にでもいるヲタクです。

所属国家は同盟。

主人公は・・・ヤンの先輩とすることにしています。

鬱展開・・・あるかなあ？

恋愛・・・今考え中

主人公の原作知識は『八月の新政府』までです。

不定期更新になりそうです。

ご意見や感想などがございましたら遠慮なく投稿してください。

ザ・見切り発車

前回のあらすじ

栗林要は手続きを面倒くさがった閻魔によって転生させられた。

以上

・・・まあそんなこんなで、今俺は揺り籠で母親が笑顔で見つめ手いる中あうあうしている。

え？全然分からない？

仕方が無い、最初から話そう

気が付いたら俺は揺り籠の中にいた

どうやら俺は転生したようだ。

そうそう、俺の名前はリーナ・エレクトリックって言うんだそうだ。
なんか外人っぽい名前だなオイ

ちなみに性別は女の子な

つまりはTS転生ってことか。

まあ別にいいけど。

取り敢えずこれからは一人称を私ということにする。

「あうあう・・・あううああうあうあ？（しかし・・・これはどう
いうことなんだ？）」

数人の少女が私を不思議そうな眼で見つめている。

どうやら私の姉らしい。

あ、ちなみに私は7人姉妹の末ね、両親ハッスルしすぎ。

このまま後娘が5人生まれてそこに養子の息子が入ったら・・・
うん、素敵なエロゲーの出来上がりってことになるな。

さて、そんなことよりも今のこの状況はどう考えるべきなのだろう
か？

「赤ちゃんかわいい」

「サルみみたいな顔だな」

「ちょっと、ルナ姉さんだけズルーい、私にも触らせてよ」

「ほらー、プニプニ☆」

「たかいたかい」

「メルランツ、早くこっちに渡しなさい」

「やだよーだ」

現在私は姉達に遊ばれています。

全員美少女なので勝ち組の気分を満喫しています。

フッフ、世間のもてない男たちよ悔しかろう悔しかろう

そう言えばここって何の世界だっけ？

確か閻魔大王は銀・・・何とかか言ってたっけ

と言うことは目の死んでる侍でも出てくるのかな？

だとしたら隻眼の少女にアタックに向かわねば！

私は百合が好きだったからな、

だけど卵から化学兵器を作り出す最終鬼畜姉は謹んでご遠慮いたします。

もしくはロン毛の革命家も良いな。美味い蕎麦屋知ってそうだし

マヨラー侍は・・・近寄らないほうが良いな

姉たちに玩ばれながらそんなことを延々想像していると、ベレー帽被った中年の男がやってきた。

(ん？あのベレー帽・・・どこかで見たことあるな・・・どこだっけ？)

それを見た姉たちは「お父さーん！」と叫び、男の方へと駆け出した。

『メリー、アリス、メルラン・・・みんな元気そうだな、いい子にしてたかい？』

どうやら私の父らしい。

ちなみに私は3番目の姉であるリリカって言うお姉さんに抱かれている。

姉たちにそれぞれ声をかけていた男は私を見た途端目を輝かせて

『おお、この子が・・・』

と言って抱きしめた。

ちょっいきなり・・・グエック、苦しい・・・

またまた三途の川が見えかけたその時

「あなた、お帰りなさい」

母さん？がお父さんに声をかけました。

貴方が神か

『ああ、ただいまキャロ。この娘が新しい私たちの家族かい？』

『ええ、名前はリーナ。ぴったりだと思わない？』

『そうだな、ほくらリーナ、お父さんだよ』

『戦いはどうだったの？』

『ん？パランテア星域の会戦かい？報道ではウチが勝ったことになってるけど実質は相変わらずの引き分けかな？（ホントはボロ負けだけど）ボソッ』

『それに、もし勝ったとしても帝国に交戦意思がある限り戦争は終わらないって言うことね・・・。』

『そうなるね、戦争を終わらせるにはそれこそイゼルローン回廊を封鎖するかしないかね・・・そうだ、実は今日から2週間休暇を貰ったんだ。明日は家族で遊びにでも行かないか？』

『いいわねえ、何所がいいかしら？』

『そうだねえ・・・』

両親が明日の予定について話し合っている中、私は顔を真っ青にしていた。

イゼルローン回廊って・・・もしかしてあのイゼルローン！？

ちょっと待てよ・・・

と言うことは「銀」ってあの銀英伝！？

金髪のシスコン野郎や紅茶好きのダメ人間が出て来る世界!?

いやいや、いくらあんな適当そうな奴でもあんな死亡フラグ満載の世界に飛ばすわけないってえ

H A H A H A . . .

夢なら早く覚めてくれ . . . o r z

ザ・見切り発車（後書き）

読者の皆様こんにちは
作者です。

主人公の名前はリーナ・エレクトリックになりました。
しよっぱなからいきなりわけの分からない展開については反省して
いるし後悔している。

おまけに収束させるめども立っていません。
本当にどうしようかと考え中。

でもほっというてぶっ飛んだまま続けちゃうんですけどね（・▽・）
テヘツ

今回は10年位後あたりのことを書こうと思います。

なお、感想や評価がございましたら投稿してください。

世の中何が起こるかわからない

前回のあらすじ

銀英伝世界の大家族の7女に転生した。

以上

宇宙暦767年8月25日 ハイネセン

・・・皆さんこんにちは、リーナ・エレクトリックです。
予想通りここは銀英伝の世界でした。

しかも原作キャラの大半がまだ生まれていないくらい前だった。o

r z

でも大丈夫、私は軍隊なんぞには絶対入らないつもりだから！

長女のニトリ姉さんは軍の技官になったみたいだ。

ちなみに次女のアリス姉さんはフェザーン系列の貿易会社に就職した。

私はがんばって民間企業にでも就職するさ（最近不況続きだけどね・・・）

そうそう、私たちははれて12姉妹になりました！

これでシス〇リ

今高校三年生をやっているのですが左腕の震えが止まりません。今年も受験生だ。

なので現在受験戦争真っ只中だったりする。

進路としては私立のハイネセン記念大学を受けようと思っている

あ、そうそう、何でなのか知らないけれど

最近私に男子がやけに言い寄ってきてきて物凄くウザいです。

今も帰ろうとしたら、小さい頃よく遊んだ近所の幼馴染から

『なありーナ・・・ちよつと話があるんだけど・・・』

って顔を赤らめながら夕日の照りつける教室で近寄ってきた。

『あのさりーナ、俺実はお前のことがすk「ゴメンね？」・・・ええ!?!?』

あのさあ、言うの悪いからやめとくけどさ

大体この作品の趣旨分かってる?

エロゲーじゃないんだよ?

TSだから中身男の子なんだよ?

そりゃ友達としてならイイ奴だけど恋愛対象云々以前の問題だ。

『おま・・・もしかして男なのか?・・・ゴフッ』

「私は女だ! (・・・一応)」

何だコイツ心でも読んだのか!?

・・・いや、まさか。

ここは銀英伝の世界なんだ。

そんなドラ○もんみたいな世界じゃない！

もっとう・．．あれだ、なんとなくリアルみたいな世界だ！

『その言い方、なんか微妙だぞ？』

「やかましいッ人の心を読むな！」

そう言ってこぶしを振り上げようとする幼馴染がにやけながら

『パンツ見えてるぞ．．．くまさん？』

と言った。

この瞬間、こいつの運命は決まった。

「死ぬが良い」

ドカッバキッゴスッグチャッグチャッグチャッドロドロ

．．．自主規制中．．．

「ふう、まあざっとこんなもんか．．．」

リーナは手を払いながらチラリと自分の側に転がっているモノをみた。

リーナの幼馴染みだったモノはもはやモザイクなしでは見ることが出来ないほどグロイ。

幼馴染みよ安らかに眠れ、君の活躍は暫くは覚えてると思う（教訓的な意味で）。

紅いペンキみたいなのを拭くと、リーナは机においてあった鞆を引っさげて家への帰路に着いた。

幼馴染の残骸を置いて・・・

・・・少女移動中・・・

移動中は暇なので今まで世間をにぎわせた事件とかを簡単に説明しようと思う

と言っても大体が730年マフィアについてのことだけど・・・

まず最初は私が生まれるちょっと前のことだ。

宇宙暦751年の11月14日にパランティア会戦って言うのが在ったらしい。

教科書にはコープ提督が戦死するも現在宇宙艦隊司令長官をしているジャスパー提督の奮戦で勝利したって書いてあるんだけど、後から会戦に参加したお父さんに聞いてみたらボロ負けだったそうだ。

ジャスパー提督はその時に功績を独り占めしたかったからコープ提督を見殺しにしたって言われていたことが一時期あったけど、今は大して何も言われていない。

人の噂も75日とはこのことを言うのだろう。

そうそう、この前国防委員長をしていたウォーリック退役元帥の秘書が汚職をしたらしい。

で、検察が入って現在国防省と艦政本部を調査中だとのことだ。

多分近いうちにあの人は辞職するだろう。

どこぞの古狸みたいに意地汚い人間でなければの話だけど

次に、イゼルローン要塞なんだけど・・・なんか知らん間に出来た。

世間では偵察が不十分だったと言うことで軍に対して批判しているけど

大方、フェザーンが妨害していたんだろう。

裏で何やってるのかさっぱりわからないが、彼らは基本的に自らの利益に対してのみ動く。

多分同盟と帝国の戦争をさらに大きくしてさらに甘い汁を吸おうとでも考えているのかもしれない。

全く、迷惑なものだ。

・・・おっと、そうこうするうちに家の前についてしまった。

まあ、そんなわけで取り敢えず今日も生きている。

さあ、冷蔵庫に冷やしてあるプリンでも食べようか

なんてことを考えながら家に入ろうとすると

いきなりドアが開いて飛び出してきた人と顔面からぶつかった。

私は思わず目をつぶった。

・・・チュッ

・・・あれ？あんま痛くない

恐る恐る目を開けると目の前には同じく目を開けた1つ年上のエミリー姉さんの姿があった。

そしてどういわけか私達は唇を重ねていた。

「エミリー姉さん・・・／＼／」

『リーナ・・・／＼／』

「『ポッ／／／』」

私たちは思わず顔を赤らめた。

「・・・」

『・・・』

「アー、・・・姉さん？」

『なッ何かしら？』

「・・・あの、大丈夫？」

『ええ、・・・大丈夫、問題ないわ。リーナは？』

「こっちも・・・大丈夫／／／。・・・そう言えば慌てているみたいだけどどうしたの？」

『・・・そうよ！今貴方を探しに行く所だったのよ。携帯に掛けてもつながらないしどこ行ってたの？』
ああ、そう言えば充電し忘れてたんだっけ？

「ごめん、電池切れだった。」

『気をつけなさいよ！この大切な時に・・・』

「え？何かあったの？」

何気なく聞いているとエミリー姉さんはさっきとは対照的なすごい剣幕で

『何のんきなことを言ってるの！』

と激昂した。

いったい何があったのだろうか？
恐る恐るたずねようとするとエミリー姉さんのほうが先に口を開いた。

『大変なのよ！お父さんとお母さんが死んだのよ！』

・・・え？

世の中何が起こるかわからない（後書き）

読者の皆様、作者です。

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

せっかくの元旦なので調子に乗って投稿してみました。

その割には全く下手クソな駄文になってしまいました。orz
しかし小説書きながら年を越す俺って・・・

・・・そんな事はともかくリーナの士官学校入学フラグを立てました。

ですがその先のことは全く考えておりません。

できるだけ早く考えをまとめようと思ってはいます。

感想や意見などがございましたら投稿してください。

リーナとオリキャラの説明 その1 (前書き)

この章は主人公とオリキャラの説明となっております。

リーナとオリキャラの説明 その1

リーナ・エレクトリック

本作の主人公

クロマティ高校3年

元々は富山県富山市在住のSTGとアニメをこよなく愛するヲタで厨二な高校生だったのだが、間違って殺された上に手続きを面倒くさがった閻魔によって銀英伝の世界に飛ばされた。

この世界に来てからは3次元チェスにけっこうハマっている

少女時代は前世で呼んでいたネット小説などの二次創作にあやかっ
てビルの上階から飛び降りたり、トラップに轢かれたりとさまざま
な危険行為（全てはほぼ無傷で乗り切った。）を行って周囲から気味
悪がられ、12歳の時に父親の昇進による転居で引越すまで友達
らしい友達はある日公園であった鳩に餌をやっている無口なオジ
サンと変わり者の幼馴染位だったらしい。

得意技は弾幕よけ。

普段の姿は明るくて人気がある少女・・・らしいのだがいざ豹変す
ると結構怖いらしい。

身長170センチ

銀髪のアストレートに紅い瞳。胸はせんな、何をするー！

ニトリー・エレクトリック

エレクトリック家の長女

機械いじりが昔から大好きでよく壊れたテレビやPCを分解したり
していた。

最近では自分で壊れた部品を利用して手製のPCを一から作ったり
している。

（しかも、軍用のPC並みに性能が良い）

ハイネセン記念大学の工学科をトップで卒業し、軍のヘッドハンティングもあり造船技官になった。

現在技術准尉として見習い修行中

水色の髪のスインテールに髪と同じ色の瞳の持つ

アリス・エレクトリック

エレクトリック家の次女

人形作りが趣味だったので将来の夢は人形職人を目指していたらしいのだが、フェザーン系列の貿易企業『NGK貿易』に入社。

営業課にて仕事を行っている傍ら人形を作ってネットで売っている呪術も好きらしく、よく藁人形を作って憎たらしい奴の名前を書いて夜中に釘を打ち付けている。

栗色の髪のショートヘアに碧い瞳を持っている

むn・・・グッ、急に胸g・・・ガクッ

リリカ・エレクトリック

エレクトリック家の3女

ハイネセン中央大学の3年

3つ子の長女

カップリングが大好きな腐女子。

よく他の二人の妹と同人誌を書いてハイネセンドームで毎年行われるコミケに参加している。（主にBL）

結構好評らしい。

銀行員になるためにがんばっているみたいだがどうなるかは分からない

性格はかなりツンデレ
銀髪のショートで水色の髪を持っている

エミリー・エレクトリック

エレクトリック家の6女

ハイネセン記念大学の1年

建築士の資格を取ろうと勉強中

根がまじめな性格なのだがよく昼寝をしている。

結構抜けていてよく遅刻したりしている。

かわいい物に目がなくよく家に持ち帰っており、部屋の中はかわいい物で一杯。

とは言うものの、一家の中では最も常識人なのかもしれない

趣味は料理

うす紫色の髪のショートで水色の瞳

黄色いリボンをつけている。

キャロ・エレクトリック

リーナたち12姉妹の母親

元同盟軍少佐

元々は首都警備艦隊で、砲術参謀を務めていた。

夫のとは統合作戦本部に行った時にたまたま出会い、そのまま勢いで結婚することになったのだと言う。

夫婦仲は異常に良かった様だ。

通販が趣味で、よくいろいろなものを注文している

背が異常にちっこくて、小学6年と大差がないくらいだった。

宇宙暦767年8月25日に事故で夫と共に死亡

エドワード・エレクトリック

リーナたちの父親でキャロの夫

同盟軍准将

第12艦隊の分艦隊司令

キャロとの出会いは統合作戦本部での仕事にふとキャロを見つけ、一目ぼれしてしまい、その後色々あって結婚することになったのだと言う。

（ちよつと待て、それってロリく・・・モガモガ）

元々は小説家を目指していたそうなのだが、家が貧乏だったので仕方なく軍隊に入ることになってしまった。

妻と同じく通販が趣味で、いろいろなものを注文しているのだが、よく失敗してしまう。

例えば・・・『よく眠れるベッド』を頼んだのに届いたのは『良く眠る猫』だったとかその様なことが殆ど。

（ちなみに猫は現在ぬこ（♀）と言う名前で家で飼われている）

宇宙暦767年8月25日に事故で妻と共に死亡

リーナとオリキャラの説明 その1（後書き）

皆さんこんにちは、作者です。

取り敢えずこちら辺で姉妹の紹介でもしておいたほうがいいなと思いますして、主人公の姉妹の一部と両親を紹介しました。

……決してネタが思いつかないから中繋ぎでもしようと思
ってやったんじゃないですよ。（・▽・；）

しかし……うん、我ながら突っ込みどころが多い姉妹だなーと思います。

ですがここはあえて突っ込まないことにします。

作者自身が突っ込んだら負けです。

感想や評価などがございましたら投稿してください。

食うために・・・

前回のあらすじ

コクッて来た男子を3分の2殺しにして帰ったら両親が死んでた。

以上

『大変よ！お父さんとお母さんが死んじやった』

・・・はい？

・・・突然の両親の死に私は何も考えることが出来なかった。

なぜ？

は？

何を言っていやがるんだ？

わからないわからないわからないわからなr・・・

・・・ドサッ

『ちょッリーナ？リーナッ！？』

突然倒れたリーナをエミリーは必死になって揺すった。

・・・少女気絶中・・・

数時間後、勤め先から慌てて帰ってきた姉達や妹たちが家のリビングに集合した頃になり、ようやくリーナは目を覚まし両親が死んだことを認識できるようになった。

私は倒れていて知らなかったのだけど、姉さんや妹たちが警察から聞いた話では、どうも交通局のミスによって引き起こされた事故だったのだと言う。

そう言えば原作でそういうのが頻発していたような気がする。

「そうか、親父もお袋も死んだのか・・・」

『・・・お父さん、せつかくイゼルローンから生きて帰ってきたのに・・・』

『お父さん・・・』

（そう言えばお袋、親父が生きて帰ってきたから今晚あたりお祝いしようとか言ってたっけ？）

「なあアリス姉さん、父さんと母さんって本当に死んだんだよね？」

『・・・リーナ、何度も同じことを言わせないで頂戴。』

『ごめん、悪かった。』

「リリカ姉さん、ルナサ姉さんとエレンは？」

『二人ともまだ倒れてるわ、メルランとルナ、サニーは部屋に閉じこもってる』

「そうか・・・」

リビングを悲しみと不安が充満している中、おもむろに長女のニトリが口を開いた。

『悲しむにしろ、怒るにしろ、父さんと母さんが死んだと言う現実に変わることは無いわ。』

重要なのはこれから私たちはどうするか・・・と言うことよ。』

その言葉にみながハツとした。

そうなのだ。

このまま悲しんでいたところで両親が生き返ったりするわけが無いのだ。

済んでしまった事は仕方がない。本当に大切なのはこれからだ。取りあえず焦眉の的となるのは『今後の生活』だ。

この場合、一番妥当なのは親戚の手を借りるというものののだが、残念ながらうちの両親は両方とも天涯孤独の身の上だったし、いたとしても現在働いている2人をのぞいてもまだ十人もの姉妹がいるのだから多分離れ離れになっていただろう。

しかも悲しいことに、うちの両親は浪費癖が激しかったので貯金は泣きたいくらい少ない。

しかも親父は軍に在籍していたが今回の場合は交通事故なので軍から遺弔金が出ることはない

（恩給とかはでるけれど、それでも12人もいれば心もとない）

生命保険を解約するという手もあるが、基本的に保険会社は保険金を支払うのを渋るので手に入るのは雀の涙程度でしかないのは明白だ。（それでも貰えるだけマシだが）

そうになると、食い扶持を稼ぐために出来る限り働かなければならなくなる。

私の場合は・・・少なくとも進学は諦めなくてはならないだろう。

いくら上の2人が働いているからとは言っても他に私を含めて10人の姉妹がいるのでさすがに厳しいだろう。

だが高卒で仕事といってもなかなかいいものは存在しない。

ならばどうすべきか・・・

そうになると自ずと自らが進むべき道は見えてくる。

普通の人間がつける職業の中では最も危険ではあるが常に人を欲しており、そして最も安定している職業・・・

『軍隊』

・・・これしかないだろう。

だが、ただ兵士として戦場に行っても死んだらほんの少し遺弔金が出るだけ。

しかも指揮官の優劣や運が自らの寿命を決めるのだ。

ヤンミたいなのがベストなのだが、フォークミたいなのが指揮官になったら死ぬ確率がグリーンと上がってしまう。

早死にはしたくない。

それにどうせ死ぬのならせめて半分くらいは自分の責任で死にたい。

選択権を広げるために、そして自力で食べて行ける様にするには・
・あそこに入るしかないだろう。

できれば入りたくはなかったのだが、ここに入ればタダで勉強できる上に資格まで手に入る。

少なくとも10年近くは軍に在籍せねばならないだろうがそれまで生き残ればこちらの物だ。

同盟が終了してしまう宇宙暦800年の頃の私は50歳近くになっているので多分退役できるから大丈夫だろう。

後はヤンとラインハルトがつばぜり合いを繰り返しているのを年金で買ったブランドーでも飲みながらのんびり眺めさせてもらえればいい。

私は決意を決めて立ち上がり、それぞれ何かを考えている姉たちのほうを向いてゆつくりと口を開いた。

「私、来年士官学校を受ける……。」

食うために・・・（後書き）

皆さんこんにちは、作者です。

時間と手間をかけた割に相変わらず残念な出来になっちゃいました。

o r z

主人公が士官学校入りすることになりました。

次回は士官学校での日常を書こうと思います。

感想や質問がございましたら投稿してください。

士官候補生の憂鬱

前回のあらすじ

食えなくなったので士官学校に入学した

以上

宇宙暦769年7月12日 ハイネセン士官学校

一人の士官候補生が雲ひとつ無い青空を仰いでいた。
彼の周囲には多くの人々が倒れている。

（・・・何で俺はこんな事をしているんだ？）

士官候補生は何故こうなったのか知るために、そしてこのわけの分からぬ現実から逃避するために思考の海に沈んでいった・・・。

・・・いきなりこれじゃあ何が起こったのか全くわからないだろう。
作者も分からない。

と言うわけで少し時間を戻すことにした。

久しぶりの休日で中庭に出ていると一角に人が集まっていた。

「どうしたんだ、こんなに人が集まって？」

「ん？ああ、風紀委員のドーソンと取り巻き達が注意していたのに
噛み付いた奴を吊るし仕上げようとしているんだよ」

ドーソン。

その名前を聴くといやな感じがした。

（・・・ドーソンか、あの小五月蠅い野郎だな）

風紀委員であることを鼻に掛け、小さなことに一々文句を言う癖に、
上回生や教官たちには必要以上にへりくだる男として同期生や後輩
からは忌み嫌われていた。

「ほら、あの女さ」

野次馬の指差す方向を見ると、大量のストラップの付いた携帯を持
つ一人の銀髪の女性と不安そうな顔でとりに立っている男の周囲
をドーソンを初めとする10人くらいの人間が囲んでいた。

何所からどう見ても、集団でつるし上げているようにしか見えない
男が必死に女をなだめようとしていた。

だが女はそのような状況なのを臆するどころかむしろ楽しんでいる
ような微笑を浮かべていた。

「あら、か弱い女性一人にこんなに大勢だなんて、それでも貴方達
は軍人志望なのかしら？」

女は胡散臭い微笑を向けながら言った。

『う、うるさい！とにかくそのチャラチャラした携帯を寄越せ！ここは軍人を養成する所なのだからそのような物は不要なはずだ』

「全く、携帯一つに五月蠅いジャガイモねえ、イモはイモらしく畑に植わってなさい」

「お、おい、もうその辺にしとけて・・・」

男の声に女が耳を貸すことは無かった。

『何だとッ！貴様もう一度言ってみろ』

「あら、ジャガイモの癖に言うじゃない？」

『フン、数の優勢は圧倒的なのだからな、そう言っているのも今のうちだ！』

それは死亡フラグという奴じゃないのか？

「きゃー、怖いわー助けてー！」

女はそう叫んでいるがいかにもふざけているようにしか聞こえない
だって棒読みだもん

男が必死に彼女を止めようとしているが女はニヤニヤと相手をいかにも馬鹿にするような笑みを崩すことは無かった。

それどころか、これ見よがしに携帯でメールのチェックをしている。
その余りの挑発に怒りが頂点に達したのか一人の男が殴りかかろうとした。

マズイッ

とっさにかけてよってとめようと駆け出したが、止める事はできなかった。間に合わなかったのだ……。

だが女は無傷だった。

なぜならば男が殴ったのは女ではなかったからだ。

女は俺に向かって携帯を投げつけると、後ろで反撃しようとする彼女を止めるために抑えつけようとした男の首根っこを左手で引っ掴んで殴りかかろうとした相手の前に突き出し、自らの盾にしたのだ。携帯を受け取ったと同時に男の後頭部にストレートが入り、男（後から聴いた話だが、彼は彼女の幼馴染だったとのことだ）は耳から血を出しながら倒れていた。

周囲はその突然で、かつあんまりな女の行動に度肝を抜かれ、一種の思考停止状態にされてしまった。

その一瞬を女は見逃さなかった。

「左手は添えるだけ……」

そう呟くと彼女は左手で持っていた男を放すと右手で男の顔面突き刺したのだ。

チヨキで

『ギャーッ！目が、目があぁッ』

男は悶絶して転げまわった

女の辞書に「容赦」と言う言葉は無かった。

ドS な微笑を浮かべながら女は転げまわる男の首に右足を乗せ、体重を掛けながら左右に動かしした。

男は苦悶の声を上げているが女がやめる気配は無い、それどころか余計に体重を掛けているようだった。

「さっきまでの威勢は何所に言ったのかしら？」

『グッ・・・だ、だがさっきも言ったとおり数はこちらが圧倒しているのだ！』

すっかり逆上したドーソンたちが今度は全員で掛かってきたのだ。

女は笑いながら逃げ出した。

その目的地は・・・野次馬である自分達だった！

女が自分達の中に突っ込んだ直後、後を追ったドーソン達も自分達と衝突した。

俺達はすぐに逃げようとしたがいきなり逃げられるわけが無い。

たちまちドーソンたちの集団と衝突し、混乱した。

おそらく女はこのまま人ごみに紛れて逃げるのだろうと思われたが女がそうすることはなかった。

むしろ彼女はこの混乱を利用して相手を叩き潰そうとしたのだ。

そしてそれは完全に成功することとなった。

無関係の一般人を盾とし、思うように行動できなかった彼らは女によって一人ずつ完全に各個撃破される形でそれぞれ一撃でつぶされていった。

女が俺たちの方角に突っ込んでからおおよそ2分後、中庭は無関係な

一般人を含めて20人近くが倒れていると言う文字通り死屍累々の様相を呈することになった。

特にドーソンともう一人・・・ロックウェルとかいったか・・・は文字通りモザイクなしではまともに見れないくらいにグロいことになっていた。

女はと言うと、いかにも良い汗かいたと言うような晴れ晴れとした笑みをたたえながら汗をハンカチで拭っていた。そして、ふとこちらを見ると俺の方歩いてきて、側にまで来ると手を出して

「携帯、返してくださる？」

と言った。

「・・・名前は？」

俺は携帯を手渡すと女の名前を尋ねた。

「リーナ・エレクトリック・・・貴方は？」

「パエッタ、ウィリアム・パエッタだ。」

俺が名乗ると、リーナと名乗った女は少し驚いたような顔を浮かべたが、すぐにもとの表情に戻った。

「・・・そう、よろしくね？パエッタ。」

これが俺とリーナ・エレクトリックとの出会いだった。

最も、彼女はその後すぐに教官に呼び出され、3ヶ月の謹慎を言い渡されたのだが・・・

士官候補生の憂鬱（後書き）

作者「読者の皆様こんにちは、作者です。」

リーナ「本作で主人公をしているリーナだ。」

作者「今回PV が10000越えしたのを記念して出てもらいました」

リーナ「ふむ、だが相変わらず文章が下手だな。」

作者「申し訳ございません、作者の筆力ではこれが限界です。」

リーナ「フツ、そんなのだから何時までもお前は山田なんだ。落語の席の座布団管理人のパチモンでしかないのだ」

作者「座布団管理人って何だよ！山田君か？笑点の山田君なのか！？」

リーナ「それ以外に何がある？何所にでもいる村人Aのほうが良いか？」

作者「・・・もう、座布団管理人のパチモンで良いデス」

リーナ「ふむ、さて次回なのだが・・・実は作者がまだぜんぜん先を考えていないのでな、言うことができない。ほら、さっさと読者に謝れ」

作者「・・・読者の皆様誠に申し訳ありません、そのうち新しい話

を書きますので命だけは、命だけはお助けくだされ・・・。」

少女の見た同盟の原風景

前回のあらすじ

ドーソンをボコった。

社長と会った。

謹慎処分を食らった。

以上。

宇宙暦770年3月22日

桜のつぼみが膨らんできた頃

この日、私達は晴れて士官学校を卒業することになった。

『諸君らは今日より悪逆非道の専制国家を妥当する勇敢なる戦士として……』

国防委員のお偉いさんがなんか壇上で喋ってるが取り敢えず暇なので簡単に士官候補生時代のことを振り返ろうと思う。

去年の10月頃に謹慎処分が解けたんだけど、大変なのはその後からだった。

謹慎と言うことはすなわち単位が取れないと言うことだ。

正直言ってこれはかなり危なかった。

元来、一部の科目を除くと成績の余り良くなかった私はもう一つでも落としたら最期、即落第と言うことになる。

まあ、それはそれでいいのだけれど、それでもせつかく4年間もいたのだから卒業はしたい。

と、言うわけで最期の数ヶ月は多分一生で一度歩かないかぐらいの勤勉さを持って勉強してみたと思っている。

そのお陰かどうか分からないが何とか卒業までにこぎつけることが出来た。

しかしまあ、士官学校での4年間は色々なことがあった。

あの喧嘩のあと、ウザかったドーソンとかロックウェルとかは怪我で3ヶ月も入院することになったらしい。

ざまあww

幼馴染は・・・一時は意識不明の重態になったがギャグで出来ているから大丈夫だった。

まあ、アレ以来3人でよくつるむ様になったからいいのだけれど。

艦隊戦シュミレーションでは取り敢えず幼馴染とパエッタの指揮する機動部隊と戦艦部隊を盾にし、その隙に自分の指揮する巡洋艦戦隊を突っ込ませて敵艦隊をボコボコにしたり、さっさと叩き潰せる

敵を面白半分に包囲してじわじわと罅り殺しにしたり、わざと敵を小惑星帯に立て籠もらせたのを包囲して相手を日干しにしたりと、結構面白いことをしたのだけれども周りからは人でなし呼ばわりされた。

何でかしら・・・？

戦闘艇の操縦は前世から好きだったSTGみたいなモノだったのでダントツのトップになることが出来た。

ボ○やス○カが無かったのが辛かったけれどそれでも余裕で切り抜けることが出来た。

しかしあの弾幕はいったい何なのかしら？あれじゃイージーモードより楽よ？

せめてノーマルモードくらいにしようよ、でないと生き残れないと思うのだけれど・・・

まあいいわ、面白かったし。

パイロット志望に切り替えないか？との誘いも受けたが断ることにした

だって戦闘艇のパイロットってすぐに死んじゃう職業なのだ。

シールドなし、装甲は紙、スピードはまあまあな機体でいいのは運動性能と給料だけ・・・うん、とても死にやすい職場だ。

そんな訳だからもう蛍の墓の蛍よりも早く死んじゃうのだ。

節子だって『なんで戦闘艇のパイロットって死ぬん？』と聞くこと間違いなしだろう。

ケンプみたいな例が必ずしも無いわけではないのだけれどもそれでもやはり稀有なことだった。（この時点で彼はものすごく有能だと言うことが明らか）

それに、そもそも私は実働艦隊か補給基地勤務を志望しているのだから。

（前者は格好いいから、後者は生き残りやすいから）

年に1度行われる格闘大会では全員が一度に掛かってきたので取り敢えず手にあった日傘を使用して全員半殺しにしてやったりと、取り敢えず他にも色々やってたらどういいうわけか鬼畜で外道でDSな女というレッテルを貼られてしまうことになった。

自分に突っ掛かって来た奴をしばらく足腰立てないくらいボコボコにしてやっただけなのに・・・

で、いつの間にか『白銀の魔王』って呼ばれるようになってしまっていた。

これを考えた奴は絶対に厨二の末期症状を持った奴だと思う。

全く、私は遊び好きの平和主義者だというのになんと言う仇名かしら。

考えた奴は絶対に見つけ出してシメてあげましょう。

ククク・・・どんな声で鳴くのかとても楽しみ

あ、そうそう、私のハンモックナンバー（いわゆる席次）は4880人中1982番だった。

あんまり良くないけどまあ良しとしましょう。

（ちなみに社長は12番で幼馴染は4番だった。）

最終的な成績はこんな感じ。

射撃…63点、戦闘艇操縦…98点、戦史…57点、戦略理論…58点、

艦隊戦シュミレーション…58点、機関工学…56点

戦術理論…63点、航宙術…70点、帝国公用語…56点

・・・といった感じだった。

まあまあ・・・と言った所かしら？

この分じゃ辺境方面の航路士官になるのがベストかも知れないわね。
と言うかそれが志望なのだけど。

・・・おっと、そうこうする内に終わってしまったみたい。

私は卒業証書と少尉の階級章を手に入れた二人の友人の元に向かった。

二人は女性の後輩達に囲まれていた。

あの二人は私と違って元々女の子達から人気があったから・・・。
なんか幼馴染が女の子に囲まれているのを見るとかなり腹が立つ。
モテる者に対する僻みと言う奴だろうか・・・？

「二人とも卒業おめでとう」

「ああ、そちらこそ」

「おめでとう、リーナ。」

『あ、リーナ先輩、卒業おめでとうございます。』

数人の後輩がこっちにやってきた。

あら、ホーウッドじゃない？

それにアップルトンも

「貴方達どうしたの？」

『『いえ、リーナ先輩に卒業の花束を渡すですよ』』

「あらありがとう、うれしいわ」

元男だった身としては少し恥ずかしいかなと思うのだけれど私は花が大好きだ。

女の子になった影響なのかもしれないけど・・・悪い気はしない。

「まあリーナは顔だけh・・・ハボック！グチャッ」

知らないことを言おうとした幼馴染を手を持っていた筒で殴り飛ばした。

耳から血が出ていて首が変な方向に曲がっていても脈が別に無くても気にしないわ

びくびくと痙攣しながら大量の血液を垂れ流しているけど知らない。

ふと見るとこちらを憎たらしそうに10人ばかりの全身ギプスのミイラ男達が睨んでいた。

多分ドーソンとロックウェル、そしてその取り巻きだろう。

先月の格闘大会で遊んであげたのに・・・まだ生きていたのね、台所の黒い彗星並みに凄まじい生命力だわ

彼らのほうに向かってにんまりと笑うと二人はビクリと振るえて慌ててどこかへと走って行った。

何か用事でもあるのかしら。ねえパエッタ？（ニヤニヤ）

「あー……お前はもう少しそういう性格直したほうがいいぞ？」

大きなお世話よ。

「……煮て喰うわよ？」

「……まあそれよりもだ、どうだ？これから卒業記念に皆で飲みに行かないか？金は去り行く我々先輩の驕りだがな」

「いいわね、じゃあ逝きましようか？アップルトン、ホーウッド、貴方達もいらっしゃい花のお礼にご馳走するわ」

『『ハッ、よろこんで！』』

私達は士官学校の近くにある良く夜中に抜け出してのみに言った酒屋「紅月亭」に向かって行った……。

少女の見た同盟の原風景（後書き）

読者の皆様こんにちは
作者です。

今回は結構難産でした。

ビューロー「そのわりににもかかわらず駄文なのは一体どういうことだ」

ファーレン「何をやっていやがる」

リーナ「作者が無能だからじゃないかしら？」

アッテン「俺でももう少し感受性のある文章を書くぞ？」

作者「すいません、スイマセンスイマセン・・・生まれてきてすいませんごめんなさい！ですから命だけは命だけは・・・」

パエッタ「まあ作者が泣こうが死のうがどうでも良いのだが、次回はどうするのだ？」

作者「グス・・・ええと、次回は一応戦闘の場面を出そうと思ってます。どんなのかはまだ未定ですけど・・・。」

ポプラン「まあどうせ駄文なんだからどうでもいいけどよ」

ヤン「その判断は正しい」

・・・読者の皆様からの批判や感想をお待ちしております。

150年目の星間戦争

前回のあらすじ

卒業した。

パエッタやアップルトンたちと飲みに行った。

以上。

宇宙暦770年4月、何とか士官学校を卒業したリーナ・エレクトリック少尉は

卒業後の1年、統合作戦本部の資料室で簡単な書類手続きなどを行った後

宇宙暦771年ジャムシード管区の航路管理センター勤務を勤め、中尉に昇進し、

その後第8、第9、艦隊勤務を経て774年には大尉に、777年の4月には第7艦隊勤務中に少佐に昇進した。

この間、特に戦功も無かったが失策も無かったので上級者の戦死などに伴って順当な出世を遂げつつあった。

そして数ヵ月後の宇宙暦777年7月7日

帝国軍がトラーパーハ星系に進出したことを察知した同盟軍宇宙艦隊司令部は第7、第2、第11、第5艦隊に出撃命令を下した。

リーナは第7艦隊分艦隊付の航海参謀として、この戦いに参加することになる。

これがリーナにとっての最初の死線となるのだが、未来を予知する力を持たぬ当人に知る由は無かった・・・

『我々の目的はトラバツハ星系に進出した帝国軍の撃破である。』

第11艦隊司令官ジョゼフ・オブライアン中将の言葉から会議は始まった。

帝国軍の総数は6個艦隊5万8千隻、対する同盟軍は4個艦隊3万6千隻と帝国軍側が有利。

こちらは進撃する帝国軍の正面に立ちは大かつていつも通りの迎撃戦を展開し、帝国領内に丁重にご帰還願うというものだった。

まあ妥当な判断だと思う。

こっちは少ない損害で敵に帰ってもらえればそれでいいのだから。とはいえ問題も多い。

現在彼我の戦力差はおよそ1…2。

一応議会の追加予算が下りればもう2…3個艦隊が前線に投入できるらしいのだけれど・・・

下手をすれば各個撃破されかねないと言う危険があった。

これに関してはすぐに動こうとしない議会に対して腹が立つ反面仕方が無いと思う。

なぜならば、民主主義政体というものはいかなる事にも時間と手間が掛かるものなのだから・・・。

会議が終わった後、リーナは食堂でパエッタと幼馴染を見つけると、コーヒーの入った紙コップを片手に話の輪に加わった。

「今度の戦いは生き残れそうかしら？」

『まあ大丈夫だろう？』

『パエッタは旗艦の艦長。お前と俺はそれぞれ艦隊の参謀だ。』

『良くお前が参謀になれたな、どっちかと言うと指揮官が一番いいと思うのだが・・・』

『確かに、怠け者は司令官にすべし・・・ってうボアアアッ』

ガシャンツバキドカゴスバコンツドスドスツ・・・ピチューンツ！！

「・・・何でかわから無いけれど、そういう職に着いちゃったのよ。」

『・・・まあそういう事にして置こう』

と言うことでリーナとパエッタは顔面から床に突き刺さっている幼馴染をあえて無視して仲良くブランデーを飲むことにした。

・・・パエッタは心配していたが、彼は基本的に台所の黒い彗星並みにタフなのでそれほど心配してはいなかった。

・・・それから1時間ほどして、3人はそれぞれの仕事場へと向かって行った。

「砲撃開始！」

「フアイヤーツ！」

無数の光線が宇宙空間の暗い宙を切り裂いてゆく
第3次トラーパーハ会戦が始まった。

私はただモニターを覗いているだけだった。

時折、いくつかの爆発による閃光が発生する。

艦が撃沈される時に起こる爆発の光だ。

果たして、あの光の中に入りたい何人の乗員がいたのだろうか？

それを知る手立てなど無い。

正確な数を知ることが出来るとすれば、それはおそらく戦争が終わり、帝国と同盟双方の情報が開示される時なのだろう。

（このまま全てが原作通りに行くとすれば後20年位後にそうなる。

）

「航海参謀、艦隊を戦線の中央部に配置せよとのことだ。艦隊を移動させてくれ」

おっと、命令が来た見たいね

「了解しました。・・・通信参謀、直ちに「A」G部隊にベクトル座標α21、γ-11、β27に移動するように、M」Zまでは敵を警戒しつつ後退、それからH」N部隊は本隊に後続するように」と言うのを発光信号と短波通信で伝えなさい」

『了解しました。』

そう言う通信参謀のナカジマ中尉は敬礼をして通信所へ連絡に向かった。

数分後、命令を受けた各部隊が一斉に動き出し、15分後には完全に陣形を整え、主力部隊の戦線中央に展開した。

そして戦闘はそのまま継続されていく

それでも、推進剤やミサイルなどの補給のために艦隊は時折後方に下がり、補給を受けたりした。

こんな感じでgdgdな戦いが3日ほど続き、4日目の13時ごろ、艦隊は昨日と同じように敵艦隊との交戦をしていたのだがいきなり敵艦隊の一部が突出して突っ込んできた。

余りに唐突な敵の攻撃に同盟軍は完全に浮き足立った。

『敵艦隊、突っ込んできますす!』

『なんだと! 応戦しろッ、敵を一步もこの先に通してはならん!』

司令官の切羽詰った声を上げる。

まあ確かに大変だろう。私達の艦隊の後方には無防備な補給艦と護衛の少数の艦艇がいる程度なのだから

(他の艦隊は各方面の敵の迎撃に回っていたり再編中だったりして手薄だった。)

しかも突っ込んできた敵艦隊は4000隻近くなのに対し、こっちは損傷艦を後方に下げたり、部隊の一部を他の戦線に振り分けたりして戦えるのは2000隻未満となっていたので、兵力差は著しく不利だった。

だがここで敵を食い止めないとこちらが分断される危険性をはらんでいるので必死にもなる。

と言うかなんでこんな戦線のアキレス腱にもう少し兵力を充当しておかなかったのだろうか?

まあ、全体的に兵力不足で何所もかしこもヤバイのは分かっているのだけれど。

艦隊は密集体形を取って必死に反撃を開始した。

私の乗り込む旗艦『カサンドラ』のビーム砲も咆哮する。

しかしそんな時、旗艦にも一発の流れ弾が命中した。

艦橋付近に命中した弾丸は薄っぺらい紙装甲をぶち破り内部に突入と同時に信管を作動させた。

激しい爆発が起こり、破片が舞い、極太のケーブルが踊り、艦橋にいた人々を吹き飛ばす。

リーナもケーブルにモロにあたったり、そのまま吹き飛ばされてスクリーンに顔面から突っ込んで意識を失った。

そして数分が経過する・・・

イツツ・・・ああ、まだ頭がグラグラする・・・久しぶりに脳天から落ちたからかしら？

でも小学生の時に20階のビルから紐無しバンジーした時よりはずっとマシかしら？

そう言えば・・・戦況はどうなっているのかしら？

私はすぐに指揮所に向かった。

するとそこには司令官を初めとする数人の将校が倒れていた。

「司令官！大丈夫ですか？・・・死んだりしてませんよねえ？」

『ウウ・・・』

あら、まだ生きてるなんて幼馴染ほどではないにしても結構しぶといわね。

『・・・エレク・・・トリック少佐・・・』

「何でしょう？」

『現在司令部d・・・無事なので最高位なの・・・貴官のようだ。全体の指揮・・・戦隊司令部に任せ・・・ら私に代わり・・・本隊の指揮を執ってくrゴボオツ・・・士官学校最凶の魔王と呼ばれた・・・君の手腕に期待す・・・る』ガクツ

そう言って司令官は意識を失った。

ちなみに彼にはまだ脈があったので軍医を呼んでおいた。

さて如何しようかしら？

艦隊の指揮を執るように命ぜられたわけだけれど・・・

まあ良いわ、取り敢えず残存艦艇の掌握と戦況の確認、上級司令部に現状の報告と増援の催促をしないと

まずは戦況・・・うん、ものすごく悪いわね。

敵艦隊の攻撃目標がこちらに向きつつある上に、統制が取れてないから各部隊がバラバラに戦っている状態だ。

一刻も早く戦線の再構築を行わないと、完全に艦列が崩壊してしまうだろう。

・・・空母戦隊司令部はそれなりに部隊を掌握しているみたいね。取り敢えず彼らと連絡を取ることにしましょう。

「ナカジマ中尉、空母部隊の司令官に通信をつなぎなさい！」

数秒後、空母部隊の指揮官の顔がスクリーンに映った。

「スプルーアンス大佐ですね？私は分艦隊の航海参謀のリーナ・エレクトリック少佐です。旗艦が被弾し司令官が重傷を負われたので私が変わりに本隊の指揮を執りますので、閣下に艦隊全体の指揮をお願いしたいのですが？」

『・・・なるほど、了解した。ただ、少しばかり艦隊の掌握に時間が掛かるのでそれまで苦しいだろうが貴官の戦隊で時間を稼いでもらいたい。』

「了解致しました。微力を尽くしますわ。」

『頼む』

そう言うときスプルーアンス大佐は通信を切った。

まあ頼まれた以上は仕方があるまい、幸い本隊は基本的に比較的后方に展開していたので混乱は少ない。

取り敢えずTBSを使って戦隊全艦に私が指揮をとると言うことを伝えることにする。

戦隊は現在まだ三百隻以上を保有していたし、ほかに近くの戦隊司令を失った艦艇が集結しだして五百隻近くにまで膨れ上がっていた。

「あー、私は司令部で参謀をしているリーナ・エレクトリック少佐だ。司令官が負傷なされたのでこれより本戦隊は私が指揮をとる。

家に帰りたいのなら、私の指示に従うように

じゃあ指示を下すわね？これより我々は後退、再編成を行う味方を援護するためにU字陣形を築くのでA～Cまでの部隊は後退、残りの部隊は現宙域を維持せよ。なお、戦隊内で母艦機能を持つ全ての艦は直ちに艦載機を全機発艦させるように。以上！」

これは原作で言うアムリッツア会戦の前哨戦でキルヒアイス相手にヤンが使用しようとした戦術だ。

敵をU字の中に引き込んで一気に反撃して敵を一時的にひるませるのが狙いだ。

そして艦載機を発進させたのは・・・まあ同じく原作のパクリという奴よ。

上手くいくかどうかは運しただけど・・・。

何はともあれ、指示は出した。

後は私の指示に従ってくればあるいは・・・

・・・結果的に彼女の作戦は成功することになる。

後退するように見せかけたエレクトリック戦隊の動きを察知した敵はそれに追いつがるように進撃し、リーナの築いた小さな縦深陣地に引きずり込まれてしまったのだ。

『司令官代理、敵が密集しました。』

側に立っている砲術参謀のギブス大尉が嬉しそうに言った。

（無事だった数少ない司令部要員の一人で取り敢えず参謀長を命じた。）

リーナは相手を見下すように細く微笑むと

「戦隊全艦、一斉射撃開始。・・・一撃でしとめなさい」

とドスの聞いた声で言った。

と、同時に先ほど発進させた戦闘艇部隊にある命令を送った。

リーナの命令を受けた各艦は敵に仕返し of 猛砲撃を加えた。

この攻撃により帝国艦隊の進撃は完全にストップしてしまった上にスプルーアンスが艦隊の再編成を成功させ、包囲網に参加したのだ。これにより1000隻以上にまで膨れ上がった同盟艦隊の網に誘い込まれた帝国艦隊は見る見ると数を減らしていく。

直ちに半包囲された味方を救出するために増援が向かうが、それは適わなかった。

なぜか？

リーナが最初に発進させておいた戦闘艇部隊が原因だった。

リーナは暗号電で戦闘艇部隊は包囲網の後方にいる敵艦のエンジン動力部を攻撃して相手を漂流させて包囲網に蓋をせよ・・・と命じたのだ。

ランテマリオで同盟艦隊が使用したのと同じ手だ。

味方を救出しようにも味方艦が邪魔で攻撃できない。

（一部の艦長や戦隊司令が味方艦ごと撃ってしまおうと言ったりしたが、上級司令部から止められてしまった。）

しかも悪いことは重なるもので、この頃になると他の戦線も落ち着き、左右両翼の戦線から増援が到着しだしたのだ。

リーナはスプルーアンスを通じて彼らにこちらの救援に直接向かうのではなく、突出してくる敵の根元への集中攻撃を依頼した。

これで攻勢を掛けてきた敵部隊の根元を切断し、包囲してやろうと考えたのだ。

増援部隊側もそれを了承し、根元へと向かって攻撃を開始した。

7月12日午後11時12分、帝国軍の突出部は根元から切断され、7千隻近い帝国艦艇が包囲されることになった。

無論、帝国軍側も何度となく救出作戦を行ったが、救出できたのは千に満たない艦艇であった。

これにより戦局は一気に同盟有利に傾いた。

しかし同盟側の将兵の疲労は限界に達しており、これ以上大規模な攻勢は掛けることができないでいた。

一方の帝国軍側もこうむった大損害による艦隊の再編成や補給で手一杯となっていた。

そのため、戦局は再び停滞し、両軍はまた初期のg d g dな戦闘へと移行していくことになった。

ちなみにリーナはその後も戦隊の指揮を執り続けた。

・・・で、7月18日午前3時ごろ、トラーバツハ星系に同盟軍側の後詰である第6、第8、第3艦隊が到着したので、帝国軍は引き際だと感じて戦場から離脱。

同盟軍側も戦闘継続が限界に達しつつあったので、戦場から離脱し

ていった。

これが第二次トラーパーバッハ会戦である。

この戦いの後、戦線を長期にわたって維持し、反撃の機会を作ったリーナは帰国後、中佐への昇進が決まることとなった。

『ようリーナ、生きていたみたいだな』

作戦会議も終了し、自室で持込の自家製梅酒を飲んでいるとパエツタと幼馴染がやってきた。

「どうしたの二人とも？」

『ああ、ちょっとそこで会ってな。それよりも大活躍したみたいじゃないか？』

『多分、帰国後は昇進するかな？』

「昇進しても面白いことはないわ。それにこの戦いで引き分けようが勝利しようが戦争は続くのだから。」

『取り敢えず、あの要塞がある限りはな・・・』

幼馴染がしみじみと言う。

そう、あの要塞・・・イゼルローンがある限り戦争は続く。

いや、イゼルローンが手に入っても戦いは続く。

そして待っているのはアムリッツアの消耗戦とそれに続く内乱と帝

国軍の侵攻による「同盟終了のお知らせ」だ。

いや、ラインハルトが帝国軍の指揮権を得た時点で詰んでいるか・・・。

でもこの時代ではイゼルローン攻略Ⅱ戦争終結・・・って考えている人々も多かった。

確かに一つの目安にはなるだろう。

侵攻作戦みたいにな手な厨二的野心など持たず、力攻めでは決して攻め落とすことは出来ないあの要塞に立て籠もり、イゼルローン回廊の狭い宙域で防衛戦を繰り返すだけならば、戦争終結とまでは行かないまでも負担を大きく軽減させることが出来るだろう。

そして後はラインハルトの遠征に余剰戦力を備えておけばよい。

そうすれば同盟は史実よりも遥かにマシな戦いが出来るし、存続する事ができるかもしれないからだ。

同盟が存続すれば私も安心して年金生活が送れると言うものだ。だからこの国にはまだまだ命を繋いで貰わないと困る。

少なくとも原作よりも100年くらい永くは・・・。

しかし、何であの閻魔は私を帝国に生まれさせてくれなかったのかと言う事が今更ながら思われる。

そうすれば、門閥貴族と言うクソな輩がいるにせよそれなりに慎ましく生きる事ができるのだから。

・・・もうッ、考えたら考えるだけ不安になってくる。

こんな時は酒飲んでごまかすに限るわ

「まあそんな訳だから・・・あんた達も飲みなさい」

『いいのか?』

「んあ? いいのよ。あ、ツマミ持ってくるから待ってなさい。」

『じゃあ、遠慮なく飲ませてもらうよ。』

『最近ブランデーばかりだったからな、たまにはこういう酒も面白い。』

「はっ、こっちは金が無くて自分で作っている密造酒よ。でも気に入っているんだけどね・・・サバ缶でいいかしら？」

『上等上等・・・』

「貴方達はこの戦いどうだったの？」

『アア・・・？俺はそうだなあ・・・』

・・・3人は夜が更けるのも忘れて杯を交わした。

150年目の星間戦争（後書き）

作者「読者の皆様こんにちは、作者です。今回は初の戦闘シーンを書かせてもらいました。」

リーナ『その割りに相変わらず下手ね。戦隊を掌握したのが全く疑問なのだけれど？』

作者「それは言うてはならない事なのですよ・・・」

リーナ『成程な、これだからお前は相変わらず駄作しか書けない男なのよ。大体アレは何？何で私が艦隊を指揮しないのかしら？おかしいでしょう』

作者「前任士官が無事なのに指揮を執っちゃったら大変な事になってしまうじゃないですか？そりゃトルハンマーとかで上級士官の乗る船が一隻残らず沈んでしまい、誰が指揮を取れば言いのかわからないとかなら一介の少佐が全艦隊を指揮することに疑問はありません。ですが今回の場合は上級指揮官が健在なので彼に指揮を執っていただけなのです。」

リーナ「成程、でもどうして私の指揮した戦隊には上級指揮官がいなかったのかしら？」

作者「・・・一応仕様と言う事で」

リーナ『まあ、今回はこれくらいにしてあげるわ。所で次回はどうするの？』

作者「まだ考えてません！スイマセン！」

・・・感想や批判がございましたら遠慮なく投稿して下さい。
お待ちしております。

試験旅行

前回のあらすじ

会戦に参加した。

梅酒飲んだ。

以上。

宇宙暦777年9月13日 バート星系 アフロディテ造船所
建造ドック

この日、リーナは造船所のドックに鎮座している巨艦を見上げていた。

「大きいわねえ」

『当然だよ。全長880メートル、最大幅220メートル、乗員870名、艦載機は80機が搭載可能・・・同盟軍の最新鋭大型空母だよ。』

側で立っている大佐の階級をつけた女性技術士官がカラカラと笑う。

『これは今日から貴女の物。この娘を頼んだよ?』

「ええ、ハマして沈めるような真似はしないと約束するわ。ありが

とうニトリ姉さん」

『ふふ、貴方みたいなお転婆を主に迎えると知ったらこの娘はどう思うかしら?』

「さあ? 案外お前かよって呆れているのかもね?」

姉の疑問の言葉にリーナはふっと笑った。

「全く・・・」

ニトリが溜息交じりに呆れながら言う視線の先には、こま鼠の様に働いている工員や機械の姿だった。

宇宙暦777年7月の初めに行われた第二次トラーパーハ会戦で活躍し、中佐に昇進したリーナは新たに建造された最新鋭の試作宇宙母艦「ミルキーウェイ」の艦長に着任するようにとの命令が下るようになった。

現在運用されている同盟軍の主力空母は一番艦の就役から20年近くが経過し、だんだんと陳腐化しつつあった。

だが、新型艦の設計は艦政本部内で搭載機数の増加か指揮管制能力の向上か、はたまた武装の強化かなどの技官同士の対立で連日激しい議論が続いていた。

しかし、新型艦は建造しなければならないのだがその建造計画が計画開始から1年たってもまだまとまっていない。

しかしいい加減に試作艦を作らないといけないと言うわけで、艦政本部内のニトリを始めとする中立派技官達は、各派閥の言い分を最大限に取り入れた設計を行うこととなった。

で、建造されたのがこの試作高速空母である。

当初は新たに高出力の機関を開発して搭載する予定だったのだが、新型機関を作る時間なんて無いからとりあえず有り合わせのモジュールの組み合わせでいいや〜と言うアバウトな理由で巡洋艦のエンジン1機と駆逐艦用のエンジンを2機搭載して速力を強化し、さらに武装も巡洋艦の主砲を搭載してそれなりに強力なものとなった。指揮系統については大量のアンテナと、最新の通信設備を搭載することによって、戦艦並みの通信能力を付与した。

こうして「ミルキーウェイ」は、巡洋艦並みの高速性能と戦闘能力、戦艦なみの統制能力を持つ大型空母として就役することになった。

そんなわけで早速正式採用に向けた試験を行うこととなり、艦長としてリーナが選ばれることになったというわけだ。

そしてリーナが艦長に着任してから一週間後、乗員のほかに数人の技術士官や民間造船会社の技師が乗り込んだ「ミルキーウェイ」は威力偵察をかねて辺境にあるドーリア星系に向けて出撃していくことになった。

ああ、今日も星空が綺麗ね・・・なんだかぼかぼかしててついウトウトして・・・

『艦長、ボーっとししないで下さい。』

副長のミッチャー少佐が脱力しながら嗜める。

士官学校を卒業した当初から空母に乗り込んでいるいわゆる母艦屋だ。

航海屋の私より空母のことに精通しているからとても頼りになったりする。

「あらごめんなさい、ついウトウトしちゃってたわ」

『全く、しっかりして下さいよ。もうすぐ本艦はドーリア星系に入ります。』

「そう？じゃあ予定通り恒星ドーリアを利用してスウィングバイテストを行いましょう。」

『了解しました。』

しかし試験航海って言うのは暇ね。

こんな時にアイツがいれば暇をもてあますことなんて無かったのに・

・・。

アイツは今頃どうしているのだろうか？

彼女でも作ってイチャイチャしているのだろうか？

だとしたらなぜか知らないけれど猛烈に腹が立ってきた。

前世がモテない男だったことが原因しているのかしら？

取り敢えず帰ったらアイツをシメる事にしましょう？

フフフ・・・

sideミッチャー

せっかく新鋭艦の副長になったと思って喜んだすぐ後にあの士官学校始まって以来最凶の魔女が艦長だと言う知らせを聞いた時、俺は絶望した。

「1人で数百人の同級生を半殺しにした。」

「彼女の機嫌を損ねた者は盾にされたり、士官学校の屋上から突き落とされたり、とギャグ補正ですらどうにも出来ないくらい酷い仕打ちを受けた」とか・・・。

「女子供でも容赦なく惨殺死体にするような外道な性格」だとか。

彼女の悪名や正に無数。

軍内部で現在ある意味帝国軍以上の脅威と目されている女。

それが俺の上司になる・・・。

まるで無実の罪を被った者が死刑判決を受けたかのような心情だった。

（ちなみに通知を届けた人事担当者も末期ガンを伝える医者のような顔をしていた。）

しかし、艦橋にて初めて出会い、それから今に至るまでの彼女の様子はそれとは少し遠いような感じであった。

何を考えているのか分からない性格。

死んだ魚のような目。

軍服の上に着込んでいる私物の白衣。

書類仕事は基本的に部下に丸投げし、自分は「健康と肌に悪いから」と言う理由で毎晩11時には必ず就寝する生活態度。

最初に見たときの第一印象は「何だコイツ？」だった。

所詮噂は噂でしかなく、正体はただの怠け者士官だったのではないのか？

そう思っていたのだが今はどうだ？

ドス黒いオーラを体から発散させ、狂気でも乗り移ったかのような微笑をたたえている。

その容姿や正に魔王。

・・・下手に逆らったら絶対に命などない。

俺の中の本能がそう告げていた。

いや、この場にいる兵士達も多分そう思っているはずだ。

本当にこんな上司でこの船は大丈夫なのだろうか？

俺は猛烈に不安になってきたそんな時、見張り員の一人から1本の

知らせが入った。

『帝国軍の偵察衛星を発見！』

『……どうします、艦長？』

「……あらあら、大変ねえ？」

ミツチャーの質問に対しリーナはただ胡散臭い笑みを浮かべるだけだった。

衛星を発見するとすぐにリーナ達は艦載機を発進させて衛星を葬ったのだが、どうやら味方に通信を送ったらしい。

さらに、数日前に星系外縁部に敷設した衛星がこちらに向けて敵艦隊が接近しているのを知り大騒ぎになり、会議が開かれることになった。

『敵は巡洋艦を中心とする16隻の高速艦隊です。敵の偵察衛星がこちらを発見した地点をめがけて包囲する形で進撃中とのことです。』

「大変ねえ。……逃げることは出来ないのかしら？」

すると航海長のスプレイグ大尉が

『……いくら巡洋艦並みの高速化を実現したといっても包囲された形ですからね、退路が断たれているようなものですので無理だとは思いますよ。一応、近くの警備艦隊に救援要請をしましたが、到着

するのはどんなに早くても我々が襲撃された後になります。』

と頭を振った。

「なるほどね・・・」

『艦長はいかがいたしますか？逃げるだけ逃げて捕まるか・・・それとも雄雄しく戦って母艦諸共爆砕するのですか？』

「・・・どっちにしても面白くわないわね。」

そう言ってリーナは暫く目を閉じた。

そして数秒後、おもむろに唇を薄く開け不気味に笑い出した。

「・・・ク・・・っククク・・・クケケケケ・・・」

全員が狂ったのかと思ったが違ったようだった。

いや、もしくは初めから狂っていたのかもしれない

「航海長、すぐに艦を恒星ドーリアに向けなさい。」

ワインレッドの瞳をガラリと輝かせながらリーナはスプレイグ大尉に命令を下した。

この時ミッチャーは、リーナがこれから勇者をボコろうとしている大魔王のように見えた。

高速戦艦「ハンプルク」艦橋

「司令、敵艦の位置が判明いたしました。」

『ご苦労……』

哨戒部隊司令官のエムンデン大佐は数時間前に発見した空母のとり進路を見て思わず首をひねった。

敵は星系外縁から逃走するのではなく、むしろ中央部に在る恒星ドリーアに接近しつつある。

何を考えているのかさっぱり分からない。

畏だろうか？

『敵は何を考えているのだ？』

『艦諸共自殺でも図ろうかと思っているのではないのでしょうか？ 偵察衛星の送ってきた映像を見る限り今まで見たことのない艦形でした。おそらくは新鋭艦と思われます。』

傍らに立っていた副官が冗談めかして言った。

『はは、そうかもな……。』

そうはいった物の、彼は一抹の不安を取り除くことは出来なかった。そして彼の不安は的中することになるのだが、彼はまだそのことを

知らない

数時間後、「ミルキーウェイ」は恒星ドーリアを背にして帝国艦隊と相対する。

『艦長、我々は敵の包囲下に在ります。』

ミツチャーが青い顔をしながら言った。

「そう♪予定通りね」

リーナは今にも鼻歌を歌いそうなほど上機嫌だった。

最も、その微笑みは20代後半の女性と言うよりこれから悪事をたくらむ大企業の社長の方がふさわしいものだったが。

『敵艦から降伏勧告が届いていますがいかがなさいます？』

「そうねえ・・・じゃあ『くたばれ、バーカ』って返信して、後それから例のものを恒星ドーリアに投下し投下後五秒後にエンジン全開と同時に無人にした艦載機を全機発進させる様に。」

『了解・・・上手いきますかね？』

「上手くいかなかったら全員揃って敵の捕虜になるかドーリアの溶鉱炉で火葬されるだけよ♪それから航海長、舵を貰うわよ？」

『り、了解しました。』

『司令、敵は降伏勧告を無視し、『くたばれ、ばーか』と返信してきました。』

『そうか、馬鹿な奴らめ。命だけは助かったものを・・・こうなればせめて苦しまぬように葬るのが我等の務めだ。全艦一斉射撃開s
『敵がいきなり突っ込んできました!』・・・何イ!?!』

エムンデン大佐が驚いて前方のモニターを見ると、前面に一機のスパルタニアンが突っ込んでくるのが写っていた。

「エンジンルーム、低速移動をするから機関出力を10パーセント落としなさい。それから砲術長、射線は少なくともいいからできるだけ連射できるように。」

まるで遊園地に来た子供のように無邪気な笑みを浮かべながらリーナは艦を操縦し、
紙一重でビームやミサイルを避け続けた。

何でこんなに上手く弾幕を避けられるのだ?

操縦しながら指揮を執るリーナをすぐ後ろに立っているスプレイグとミッチャーは首をひねった。

最初にドーリアに融合弾を投下して恒星風を発生させ、それと同時に

に無人の艦載機を敵艦にブチ当てるべく突っ込ませ、自らもレーザーを乱射しながら突っ込んで行く・・・。

それは正気の沙汰とは思えない行動だった。

一歩間違えば敵からの集中射撃を受けて一発も発射することが出来ずに撃沈されかねなかったのだから。

だが彼女は成功させた。

そして現在、「ミルキーウェイ」は最初のスパルタニアンミサイルをふくめて10隻の艦艇を撃沈している。

これだけの奇策を考えるだけの発想力に、それを可能とさせるほどの天才的操艦術と幸運を引き出す力。

そして恐怖による部下の統率。

（これが魔王の実力か。恐ろしい・・・。）

ミツチャーは一瞬背筋に冷たいものが走った。

そして3分後・・・。

「・・・」

『・・・』

彼らの見るモニター上にはスペースデブリが宇宙空間に虚しく漂っているだけであった。

わずか10分。そう、わずか10分でリーナは帝国軍の全ての艦艇を撃沈したのだ。

10分では脱出用のシャトルを出す暇も無かったのだろう・・・。

時折、宇宙空間から外に吸い出されて死体が漂っているのが見えた。

ミツチャーは、ふと足が震えているのが分かった。

（何を恐れているんだ、自分は軍人だ。軍人は敵を・・・交戦国の軍人を殺さねばならない・・・）

分かっている。そんなことは分かっている。

だが、そう簡単に納得できるものでもない。

ちらりとリーナを見る。

リーナは無表情に、漂い続ける死体を眺めていた。

その瞳はどこか寂しそうなだった。

・・・それからさらに数時間後ミルキーウェイは到着した警備艦隊と合流し、付近にあった

補給基地で簡単な修繕作業と補給を受けた後、試験を中断してハイネセンへと帰還してゆくこととなった。

「・・・ふう」

自室のベッドで仰向けになりながら、私は思わず溜息をついた。

何で私は軍人になってしまったのかと自問自答した。

何で軍人になったんだろうか？

両親が死んだからだろうか？

いや、私はラインハルトやヤンに無意識のうちに憧れていたのかもしれない。

さもなくば、自分は中佐に昇進した時点でもう退役していただろう。

そして彼らのようになってみたいと思ったのだろうか？

そうすると自分を酷く浅ましい奴だと思ってしまう。

特にヤンは自らのような職業軍人を嫌っていたのだから。

「私は・・・人を殺してしまった。いや、初陣で駆逐艦の航海士官になった時点で人を殺していたのね・・・。」

目を閉じようとする、モニターに移った死体が頭の中でフラッシュバックする。

少なくともこんな状態では眠ることは出来ないだろう。

「・・・お酒でも飲もうかしら？」

そう呟いてゴソゴソとベッドの下をあさると、一本のポートワインが出てきた。

ラベルには「赤玉ポートワイン」と遙か昔に滅びたはずの日本語で書かれていた。

これは・・・確か1ヶ月前にハイネセンの場末の酒屋で売っていたものだ。

コルクを開けて赤紫色の液体をコップに注ぎ、一口飲む。

甘い・・・でも、苦い。

それになんだか酔うことができそうにない。

ツマミの羊羹も甘さが足りない気がした・・・

・・・一人は辛いな・・・。

・・・早く、早くハイネセンに着かないかな・・・。

試験旅行（後書き）

作者「読者の皆様こんばんわ。作者です。」

リーナ「何で貴方がまだ生きているのかしら？」

幼馴染「と言うかいい加減に俺の名前を決めてくれないか？」

作者「そうですね・・・考えておきます」

幼馴染「お前絶対何も考えてないだろ」

作者「キノセイデス（棒読み）」

リーナ「所で今回ののはなに？駄文臭がぷんぷんしているわ」

ミッチャー「話を進めるたびに作品が劣化してきている気がするのですが？」

リーナ「最初からそうでしょ？」

作者「・・・」

幼馴染「何か言いたいことは？」

作者「・・・こんなはずではなかった!!」

リーナ「そう♪じゃあもう一回、一から物事を考えなさい・・・地

獄でね!!」

作者「アーーーーー!!!!」

感想や批判がございましたら遠慮なく投稿してください。
お待ちしております・・・。ガクッ

伝説の巨人

前回のあらすじ

試験航海に出た

偶然であった敵を全滅させた。

以上

宇宙暦777年11月4日 ハイネセン

数週間前、ドーリア星系にて16隻もの艦艇を単独で撃沈したりーナたち「ミルキーウェイ」の乗員は全員1階級昇進されることとなった。

これに寄ってリーナは大佐へと昇進することになった。

はあ、私もこれでとうとう大佐か。

将官まであと少しといったところかしら。

まあどうでもいいけど、早く退役して安穩と生活したい。

できれば辞表を出したいけど今の状態では出すことが出来そうも無い。

暫くは我慢するしかないか・・・

大佐に昇進したリーナは第4艦隊勤務を命ぜられ、同時に分艦隊所属の戦隊司令に着任した。

そして書類に埋もれていた。

ああッ何でこんなにも書類が多いのよ！

食料関係、武器弾薬の在庫量、ワープ航路計画書、艦種編成・・・
e t c

これら全部に目を通し、サインとかをしなくちゃいけない。

基本的にこういうのは部下に任せていたんだけど、今回使えるような部下達は部下達で書類に埋もれていて、とてもじゃないが出来ないと今にも死にそうな顔で言われると、流石の私でも無理だった。

というわけで現在絶賛書類仕事中。

しかし、もう2日も寝てないんだからなあ、流石にきつい。

よし・・・ッあいつらにやらせよう・・・

「まあそういうわけだから、これやっというてね♪」

『何で俺がこんなのやらなきゃいけないんだ！』

『先輩、大人しくしておいたほうがいいですよ?』

『そうですよ、ホーウッドの言うとおりです。逆らったら何されるか……（小声）』

『クソッ、どうして俺がこんな目に……』

「作者曰く「仕様」だそうよ?」

『作者ああッ俺を殺す気かアア』

「PS…多分あんたは殺しても死なないから大丈夫です」b v 作者

『ちくしよおおおッ』

その夜、幼馴染の悲しみと作者に対する怒りの絶叫は星空を駆け抜けた……。

さて、幼馴染の協力もあってエレクトリック戦隊は編成を完了することになり、ボルハン星系周辺で艦隊陣形の形成などの訓練を行うことになった。

『司令、分艦隊司令部から通達、「全艦直ちに紡錘陣形を取れ」とのことです。』

「了解。これより本戦隊はE-21ポイントに向かう。艦長、腕前を見せてもらおうわよ？」

右隣の席で指揮を取っているミツチャーは御覧あれとでもいうようにコクリとうなずいた。

『了解しました。航海長、直ちに変針だ。』

ミツチャーの命令を受け取った航海長兼副長のスプレイグ少佐もうなずいて、操縦桿を握りなおした。

程なくして、「ミルキーウェイ」の巨体はゆっくりとしかし流れるように緩やかな右旋回を行った。

後続していた百隻余りの艦艇も追隨を開始する。

「・・・ようやくこれまでもって来れたわね」

『ええ、最初のうちは大変でしたからねえ』

『新編成の部隊なんて何所も同じですよ。』

「しかしまだまだ実戦参加出来そうもないわね」

『確かに、訓練で十出来る事は実戦では一出来ればいい方ですからね』

リーナの懸念にミツチャーも賛同する。

『結局は猛訓練で百覚えさせるしかないんですよ』

「そういうものか・・・」

まあそりゃ分かっているんだけど、やっぱり楽をしたい。

そう思いながらもリーナは職務を遂行し続けた。

宇宙暦778年2月、相変わらず訓練を行っていると宇宙艦隊司令部から一通の通信が彼女達に入った。

『アルトミュール星系に敵艦隊が集結しつつあり、第4艦隊各艦はランテマリオ星系で第9、第8艦隊と合流後、アルトミュール星系へ出撃せよ』

『また戦いですか・・・』

スプレイグがヤレヤレと言いながら通信文を読む

「あゝ、何でこんな時にまた戦いなんて行かなきゃならないのよ！」

せっかく試験航海から帰ってきたと思ったらすぐこれだ。

私の背中には死神でもいるのかしら？

『仕方ありませんよ、成るようになるしかありません。』

ミッチャーも溜息混じりに言う。

「『ハア・・・』」

宇宙暦778年2月16日 アルトミュール星系

この日、両軍は衝突した。

両軍の戦力差は帝国軍3個艦隊3万6千隻、同盟軍も3個艦隊3万6千隻と完全に互角であった。

リーナの戦隊は前線最右翼で敵艦隊と長距離砲によってつつましく戦闘を続けていた。

「敵は今回も遊びの出撃と言うわけかしら？」

『その可能性は大きいでしょうな、まあこちらはいつもとおり敵艦隊とつつましく戦えばよいのですよ』

「そうね、こんな戦いで死んじゃうなんてたまったものじゃないわ」

・・・敵は片手間、こちらは国土防衛戦争・・・その違いはあってもどちらにせよ人は死ぬ。

私は死ぬのは嫌だ。

せつかく生き返ったんだ。

なのにまたあのいい加減な閻魔の所に飛ばされるのは御免だ。

せめて、自分がヨボヨボのババアになってから死にたい。

孫が出来るかどうかは・・・微妙だが。

まあ今でも27歳と行き遅れなんだ。

気になる奴はいるけど彼氏がいるわけでもない。

姉さんや妹達の何人かはもう結婚してしまっているが・・・。

・・・うん、私は私。他所は他所ね

そう言えばのどが渴いたわね、緑茶でも飲もうかしら？

と言う訳で熱い緑茶の入った湯飲みを手にとった瞬間、突然艦が大きく揺れた

「キャッ・・・・・・・・あッ熱イイイイイイ!!」

その衝撃で湯飲みに入っていた熱い緑茶は容赦なく私の頭に降り注いだ

熱い、と言うよりむしろ痛い!

私がファイヤードンス紛いの事しているとミッチャーが慌てて駆けつけてきた

『艦長ッたいh・・・・って大丈夫ですか?』

「だ、大丈夫な分けないじゃない!?!」

『まあそうですね』

「貴方は何でいつもそんなに平然としてられるのよ!?!」

『司令の影響があるのかもしれませんがね』

「私の所為!?!ちょっと、それは聞き捨てなら無いわね、この私の何所がそうするのよ?」

『司令の外道でDSで怠け者な所です。つまり全部司令の所為ですね』

「そう・・・すこしOHANASIしない？最近少し運動不足なのよ」

『肉体言語は遠慮しておきます。それよりも司令、敵の装甲擲弾兵が乗り込んできました。』

「あら、そうなの・・・ってエエエ〜！？」

オイオイオイオイツ装甲擲弾兵って何よ

『敵はおよそ30人ほどで、中佐の階級をつけた大男が指揮官のようです。なんかでっかい斧で武装してこちらの最高責任者を探しているみたいですよ』

ミッチャーはこともなげに言った。

「最高責任者って私じゃないのよ！？どうするのよ？私喧嘩は得意でも肉弾戦なんてそんな阿〇さんが出てきそうなことできるわけないじゃない」

『貴方は何を言っているんです？喧嘩が得意なら多分大丈夫ですよ。大体そんなBLまがいのことやるわけ無いじゃないですか？それに司令は女性ですから掘られる心配はありませんよ・・・あくまで多分』

「ねえ艦長、何か私に恨みでもあるのかしら？」

『そうですね、書類仕事を押し付けられて二徹させられた恨みはありますね。』

「そう・・・やっぱり貴方とは一度どこかできちんと話をしておいた方がいいのかしら？」

『そうですね、ですが今は・・・』

ミツチャーが言葉を途切れさせると同時にドアが開き、装甲服に身を包みデッカイ斧を持った一人の大男が現れた。

『・・・コイツを何とかしたほうがいいですよ』

ミツチャーは大男を指差して他人事のように言った。

ってこれオフレッサーじゃないのよ!?

『この船の艦長は何所だ!?!俺が相手してやるぜ』

『「コイツです」』

私とミツチャーは互いに指をさした

うん、彼は艦長はどいつだって聞いたんだからミツチャーで間違っていない

『つちよ、司令、あんたが最高階級でしょう!?!』

「彼は艦長はって聞いたのよ?その辺分からなくって?艦長はミツチャー、貴方でしょ?」

『いや、違いますよ』

「いやいや、貴方が艦長でしょう？」

『いやいやいや、違いますよ、もうこうなったら意地でも認めませんからね』

「いやいやいやいや、艦長は貴方だから」

『いやいやいやいや、違います。絶対違います。』

「いやいやいやいやいや、そうだから、絶対貴方が艦長だから」

『いやいやいやいやいやいや、・・・』

『あゝ、もう二人同時に相手するからいいか？』

『「それは困る！死にたくない！」』

『じゃあ最高位の者は？』

「『コイツです』」

またも私とミッチャーは互いに指をさした

『・・・オイそこの叛徒』

『ハイッナンデゴザイマシヨウ？』

溜息を一つつくと、オフレッサーはすぐ側で成り行きを見ていたス

プレイグに話を振った

『この船の最高責任者は？』

『アソコノハクイヲキタオンナデス』

『そうか、ご苦労』

『司令、ガンバツテクダサイ』

と、プレイグは私のほうをむいてカクカクと手を振った

あいつ、後で見えていなさいよ・・・

『貴様がこの船の最高位か』

もう誤魔化しは聞かないか・・・けど良く持ったわね

「ええ、ですが何か？」

『降伏すれば命だけは助けてやる』

「しなかったらミンチかしら？それに降伏したら貴方に抱かれろとか？」

『よく分かっているじゃないか。どうせ軍に入るのは淫乱な女だと昔から決まっているからな』

「エロゲだとそうね、でも私は違うと断言できるけど？」

『『マズイツ』』

ミツチャーとスプレイグは本能的に危険を察知して物陰に隠れた。ゆっくりとリーナは指揮官席の側に立てかけてあった日傘を手にする。

そこには先ほどまでのリーナとは明らかに一線を画す「魔王」の姿があった。

『ほう？俺と手合わせってか？淫乱娘』

「貴方が言った言葉・・・後悔させて上げるわクソゴリラ」

『ヌカセエツ』

「消え去りなさいっ」

ガキイイイインッ！！

日傘と斧が交差する。

『チッ』

オフレッサーが一瞬斧を離れた瞬間を見逃さずリーナは懷に突入し

ようにする。

しかしオフレッサーもリーナの行動を見逃すはずがなく、再び切りつけようとするが日傘によって攻撃をはじかれてしまった。

そしてリーナは渾身の力でオフレッサーの股間を蹴り上げた

ガゴンッ

「『グアアアアッ』」

オフレッサーは股間をリーナは蹴り上げた右足をそれぞれ押さえた。

リーナの足の破壊力は確かに強力であったが、オフレッサーの〇〇は装甲のお陰で潰れるという最悪の事態は回避されたものの、それなりの損害を受けることになった。

リーナもリーナで装甲がそれなりに張ってあるところをモロにけりつけたのだからそれなりの痛みを受けることになった。

「ハアハア・・・」

『ぜいぜい・・・』

二人はそれぞれ痛む箇所を押さえながらギラリとにらみ合ったと同時に再び二人は切りかかった。

避け、防ぎ、反撃する。その繰り返しであったが、物陰で隠れながら戦いを見守っていたミツチャーやオフレッサーの後ろにいた彼の愉快な仲間たちにはそれがとても美しいように思えた。

ルビーのような紅の瞳が怪しく煌き、銀色の髪が光を反射して輝く。

しかし二人とて人間だ。それなりに疲労の極みに達しつつあり、二人とも肩で息をしている状態だった。

リーナは傘を肩に担ぐ

「・・・まだやるのかしら？」

『ハッ、叛徒ドモの中にこんな女がいたとはな・・・だが、これで終わりだああ』

オフレッサーは斧を振り上げると、リーナに向かって目にも留まらぬ速さで斧を振り下ろした。

ガゴンッ

つい一瞬までリーナがいたところ・・・そこには彼女の姿は無かった。

・・・避けられたッ

オフレッサーがそのことに気付いた直後、彼は鈍い痛みを感じ、意識を失った。

乗り込んできた装甲擲弾兵達は隊長であるオフレッサーがリーナによって叩き潰されたことを知ると一様に恐怖し、マツハのスピードで気絶している彼を担いで逃げ出していった。

その間、わずか5秒

アニメ似よくでてくる雑魚キャラも真っ青なスピードだった。

リーナはというと、彼が倒れると同時に疲労と緊張が解けたせいかへたり込んでしまった。

しかしこの戦いによる代償も大きかった。

艦橋内のいたところは二人の殴り合いでボコボコにやられてしまった。

レーダーモニターは割られ、床は切り傷が目立った。

また、陸戦隊が突入してきたことによって数十人の将兵が死亡し、百人近くの負傷者を出したりもした。

流石にこの状況で戦いを続けるわけにも行かなかったので、エレクトリック戦隊は後方に下がり、旗艦の修理を行いつつ、艦隊に後続していた補給艦や工作艦といった支援艦艇の護衛を行うことになった。

それから数日後の2月20日 両群は呼吸を合わせたように撤退していった……。

ちなみにリーナはこの戦いで悪夢のように恐れられていたオフレッサーを撃退したことから『白銀の破壊神』と言う余りというか全くありがたくない仇名を頂戴することになった。

・ ・ ・ ちなみにこの戦いの後のスプレイグ少佐の顛末について話そう。

彼は戦いが終わってから数時間後、『顔面から階段から落ちて』全治3ヶ月の大怪我を負う事になったのだそう。

伝説の巨人（後書き）

作者「皆様こんにちは、作者です。」

リーナ『あの野獣をボコルということだったわけだが、何であんなの出したんだ？艦隊戦だけで十分だろ？（ビキビキ）』

作者「ええっと・・・主人公の凶暴さを出したかったというか・・・うん、反省はしている駄菓子菓子、後悔はしていないッ（キリッ）』

リーナ「そう、じゃあ少し貴方とOHANASIさせてもらえるかしら？」

パエッタ「がんばれよ作者」

ミッチャー「渾身のボケを期待していますよ」

スプレイグ「骨は拾っておきます」

幼馴染「葬式代は出さないぞ」

作者「ヒデエエッ」

リーナ「さあ、逝きましようか？」

作者「アッーーーー！！！！！！」

ーピチューンッ！ー

リーナ「感想や批判、質問などがございましたら遠慮なくご投稿ください、お待ちしております。」

光色トウルハンマー 上

前回のあらすじ

原始人をボコツた

以上。

宇宙暦779年6月14日 イゼルローン回廊付近

アルトミュール会戦からおよそ1年程が経過したある日、国防委員会より第四次イゼルローン攻略作戦の発動が言い渡されることになった。

参加戦力は第4、第12、第1艦隊。

艦艇総数およそ3万8千隻の艦隊は宇宙艦隊司令官のキンメル元帥の指揮の下出撃することとなった。

リーナもまた、自らの戦隊を率いて第4艦隊主力に後続することになる。

「・・・まいったわね」

正直の所、ものすごく参っている。

今更と言えば今更なんだけど、私の原作知識があるのは第五次攻防戦の時から。

つまりその前のことは全く知らないし、これまでのものはノリで戦

ってきたようなものだ。

だけど今回ののは違う。

あの水銀の塊・・・イゼルローン正攻法では決して落とすことが出来ない。

魔術師が奇策を用いたからこそ陥落させることが出来たのだ。

私達のような凡人では絶対に落とすことなど出来ない。

駐留艦隊とトゥール・ハンマーの餌食になってこの世からおさらばするのは目に見えている。

そう断言することが出来た。

何でこの時期に出兵したのか？

決まっている。選挙が近いからだろう

この国はどうも選挙が近づくとは好戦的になる。軍事上の勝利で何とか少しでも票を集めたいと思うんだろう。

まあ負ければ選挙も大負けするけどね

そういう場合私はテレビ越しに『政治家ザマあww』と言うことにしている。

でも今回は私も作戦に参加するのだから他人事のように言っているわけではない。

命かかってるんだもん

「どうしようかしら？」

食堂で食後のお茶を飲みながら私は隣に座っている幼馴染に話を振

った。

今回の戦い、コイツは第12艦隊司令部の作戦参謀として参加するのだとか

『珍しいな、お前が冷や汗流すなんて』

「貴方は私のことを何だと思っているの？」

『んー、それは・・・まあそれよりもだ、お前今回はどう思う？』

「ハア・・・ボロ負けだと思うわよ？カタログスペックを見てもあの要塞は正面攻撃では奪取できない。」

『そうだな、お前の言うとおり力攻めじゃあの要塞は落ちねえよな』

「まあ、大質量の隕石を大量にぶつければあの要塞でもそれなりの被害を出すと思うけどね？」

『確かにな・・・でも俺達の目的はあくまで奪取だからな。下手に傷つけたくない。』

まあ確かに数百万人も人口を養えるイゼルローンの生産能力は馬鹿にならない。

それにアレを手に入れば帝国軍の侵攻を食い止めることが出来るのだから。

暫くして、私は一応戦隊司令官であったので、総司令部の会議に紛れ込んで（参加して）しまった。

『我々の目的は言うまでもなく、イゼルローン要塞の奪取にある。攻略作戦を成功に導くために、諸君らの活発な議論を期待する。』

宇宙艦隊司令長官、バーソロミュー・キンメル元帥の言葉から会議は始まった。

『現在偵察部隊からの情報によりますと、敵艦隊はおよそ2万から3万前後だと思われます。おそらく、敵がこちらの情報を察知し増援部隊を投入していたのだと考えられます。』

『ううむ、敵はこちらとほぼ同数・・・ということか。』

総参謀長のアイザック・マクモリス大将が唸った。

次に作戦参謀のシャルル・ヴィルヌーブ准将が発言した。

『ここで問題となるのは如何に要塞からの攻撃を受けずに艦隊を叩くのかということです。』

敵艦隊を排除してしまえば相手は丸裸の要塞。如何様にも対処することが出来ます。しかし・・・』

私の直属の上司で、第4艦隊所属の分艦隊司令官であるアルベルト・シャーマン少将が続ける。

『我が軍の戦力比はおよそ3…2で、我がほうがやや有利です。問題としてはいかに敵艦隊を排除かにあるとってよいでしょう。』

まあそうでしょうね、たしかに艦隊の存在は邪魔だ。

それに要塞の砲台が援護すれば・・・こちらの敗北は間違い無いだろう。

と言うか、艦隊戦力がやや拮抗している以上、勝利することは無いはずだ。

なので撤退するのが一番なんだけど・・・今更そんな事言っても無駄だし絶対怒鳴られるのは目に見えているから言わないほうが良いか。

第一、一戦隊司令官でしかない私には元々発言権なんてものは無いも同然なのだから。

それから2時間後、会議は終了した。

それで決まったことなのだけど、私の艦隊は左翼の端っこに配置されることになった。

まあ、そこならトゥールハンマーの射界も限界のはずだから多分大丈夫だと思う。

あくまで「多分」だけだね

6月24日、同盟艦隊はイゼローン要塞前面に進出した。

目の前には星星の光を反射して不気味に輝く水銀の塊があった。

・・・なんかス〇ーウォーズにでも出て来そうだ

帝国艦隊も2万5千隻の艦隊を要塞前面に展開させ、万全の体制でいるようだった。

「司令、旗艦より攻撃命令です。」

「了解、全艦隊、攻撃開始！無駄弾は撃たないでね」

私が手を振り下ろすと、指揮下にある全艦艇から無数の光線が発射される。

この瞬間が私は好きでもあり、嫌いでもある。

なんか、ヤン提督にでもなったかのような感じがするから。

そして、人を殺しているから・・・。

先手を取ったのはこっちだった。

いくつか命中したと思われる爆発の閃光が瞬く。

しかし敵からお返しとばかりにレーザーやミサイルが飛んでくる。それによって何隻かの艦艇が爆炎に飲まれ、あるいは真っ二つに折れ、この世から消えていった。

私の乗艦にも時折レーザーが当たり、周囲に展開させた重力磁場によって弾き返す。

このまま数の有利を生かして敵を押しつぶすことは・・・無理か、敵が要塞主砲との連携を見せればこの優位は簡単にひっくり返る。

しかもあの要塞には400隻もの艦艇を一度に修復できるドックが存在しているらしい。

艦艇と言うものは極論すれば損傷しても沈まない限り修理すればまた出撃できる。

その修理施設が帝国側にはすぐ近くにあるのだ。

それに対してこちらで最も近いのはイゼルローン回廊の外、アスタールテ星系やダゴン星系を越えた所にあるエル・ファシルなどの補給基地だ。

（しかも100隻くらいが修理できるので勢一杯）

帝国のミュンツァーじゃないけれど、この距離の差はきつい。

出来ることならば、このまま適当にgdgdやってもらって物資その他が不足したらさっさと帰るのが無難な手だと思ったりする。

それからしばらくして、両軍はやがていつもの会戦のようにgdgdな殴り合いへと収束していった。

そして4日もの間、こんな感じのこう着状態が続くことになる。

こうなると流石に両軍共にだらけ始める。

まあ誰だっていつまでも緊張が持つわけが無いからね、緊張しているのは最前線で戦っている時くらいか

私の戦隊も適当にミサイルとかをばら撒きながら応戦をしていた。

そんな時、ソレは起こった。

「敵艦隊の一部が突っ込んできます！」

オペレーターからの報告に私は一瞬ド肝を抜かれた。

見ると数百隻ばかりの敵艦がビームを乱射しながら突っ込んできた。この状況で突撃！？何を考えてやがる！？

驚いているとすぐ近くで戦っていた戦艦が光に包まれ、爆散した。

「司令ッ」

ミッチャーからの声が飛んできて私はハッとなった。

そうだ、部下を預かっている以上ドギマギしている暇などないのだ。今はただ敵を撃退することにのみ全力を注がないと。

まず現状を整理しよう。

突出してきた艦隊はおよそ数百隻くらい、他の部隊との連携は取れていない。ならばアレは手柄欲しきで攻勢を掛けてき貴族のボンクラの可能性が高いのだけど、それに対して100隻そこそこ。

まともにぶつかれば数で崩される可能性は高い。でも私達の後方にはまだ味方がわんさかいる。彼らに苦勞してもらおうとしようかしら

「・・・無理に通さない必要は無い、陣形を薄くして突破させてあげなさい。それから、後方の部隊に連絡を入れてくれないかしら？」

『突破させるのですか？』

スプレイグが怪訝な顔で尋ねた。

「ええ、手柄欲しさに突っ込んでくる馬鹿には袋叩きになってもらいましょう。」

そういうと私はニコリと笑った。

数十分後、私の艦隊を突破した敵部隊は連絡を受けて鶴翼陣を展開していた後方の部隊からタコ殴りを受けて一隻残らず撃沈される結果になった。

これを受けて敵はズルズルと後退していった。

『この機を逃がすな！全艦最大戦速！要塞に肉薄するぞ！』

シャーマン少将からの檄が飛び、旗艦「アキレウス」が私の船のす

ぐ横を追い抜かんばかりに突っ切っていった。

『司令、われらも突撃しましょう！』

ミツチャーが張り切った声で言った。

他の部下達の目も輝いている

貴方達全員殺る気満々ね

でも大抵こう言うのって死亡フラグなんだよね、でも命令に背いたら抗命罪で怒られるんだよね

「仕方ないわね・・・全艦最大戦速！本隊に追従しなさい。ただし、出来るだけ後ろのほうでね」

『ハッ・・・了解しました。』

ミツチャーはいかにも渋々と言った表情で命令を受けた。

まあ死ぬよりはマシってものでしょう？

味方はほとんど真一文字にビームやミサイルを乱射しながら突っ込んでゆく

私達は味方が撃ちもらした敵艦をおこぼれに預かる形で少しずつ沈めていった。

暫くして、だんだんと周囲の敵が離れだした。

・・・そろそろか、念のためにミツチャーに尋ねる

「ねえ艦長、ここってトゥールハンマーの射程内だったかしら？」

『え？なにを言っているのd・・・アッ!？』

見る見る内にミッチャーの顔が真っ青になっていく。

・・・今頃気付いたか。

私は思わず身を乗り出して、1回にある通信所に大声で言った。

「通信員、全てのチャンネルを開いてこう伝えなさい!」「全艦直ちに散開! トウルハンマーが来る」とね! 艦長、取り舵いっばい、全速力で戦隊全艦は回廊の端に張り付きなさい!」

『了解! 最大速力! 取り舵いっばい!』

『と、取り舵いっばい!』

慌ててミッチャーが命令し、スプレイグが舵を切る
戦隊の各艦も追従し始め、私達は大急ぎでトールハンマーの射界から逃げ出した。

その動きにつられて、他の戦隊からも何隻かの船が慌てて離れた。
た。

その時だった

要塞の表面から放たれた極太な光が宙を切り裂き、近くにいた艦艇を纏めて飲み込んだ。

・・・数秒後、光が収まるとその空間には何も無かった。
数百隻の艦艇がいたはずのそこには、残骸のひとかけらも確認することが出来なかった。

これが・・・トウルハンマーの破壊力・・・

その反則級の破壊力にリーナを始めとする艦橋要員は一様に茫然自失となった。
だがソレもそれほど長くはなかった。

イゼルローンより再びトウルハンマーが放たれようとしていたからだ

『よ、要塞表面に高出力反応！』

このオペレーターからの声で現実に取り戻されることになった全員は大急ぎで事態の收拾と、次の嵐への備えを始めた。

『旗艦からの応答はどうした？』

『『アキレウス』からの応答はありません！撃沈された模様！』

「通信員！残存艦艇との通信の回復を急ぎなさい！このままだと敵艦隊からタコ殴りを受ける！」

『航海長ッ、最大戦速！もう一度取り舵！光線を避けるんだ！』

『り、了解とりかじいっぱ・・・』『トウルハンマー第2射来ます！』

スプレイグが復唱して舵を切ろうとしたその時、艦橋は一瞬にして

眩し過ぎる光に包まれた・・・。

アレ・・・これもしかして私死んじやうって言うパターン！？

光色トウルハンマー 上（後書き）

ユニークが1万を越え、PVも5万を越えました！

本作を読んで下さった読者の皆様に心よりお礼申し上げます。

ありがとうございます！

今回はちょっと長くなりそうなので思い切って2つに切ってみました。

下のほうにつきましてはまだ完成しておりませんが近い内に投稿しようと考えております。

批判や感想などがございましたら、遠慮なく投稿してください。

光色トウルハンマー 下

前回のあらすじ

極太ビームの威力を見た。

以上

極太な光が人の何十倍も大きいはずの船を飲み込み、装甲を砕き、人や物を焼き、一瞬にして全てを宇宙誕生前の原子の粒へと帰していく。

内部にいる人は叫ぶことも、嘆くことも許されずに死んでいく。

そんな中、リーナは司令官席でヤンのように胡坐をかきながら、通信士官からの報告を聞いていた。

「空母アフロディテ撃沈」

「駆逐艦カルディア？ 交信途絶」

「巡洋艦タナトス？ 大破炎上中」

「巡洋艦アリアドネー？！？ え？ ちょっと逝って来る？ お前は何を言っている？」

「敵艦隊攻撃してきます！ 数およそ2千」

『司令、現在健在な艦艇は七十隻ほどにとどまっております。他の戦隊も同じような感じでしょうが』

ミツチャーが青い顔をしながら報告した。
後のほうにいた私達でさえ損失率は40％に達しているのだからそりゃこうなるわな

「他の戦隊との連絡を入れて最先任のものを探さない。指揮系統がバラバラでは各個撃破されるだけよ」

『了解』

「戦隊各艦は新たな指示があるまで各個に敵に当たりなさい」

『司令、後衛部隊を指揮していたパエッタ大佐から通信が入っております』

パエッタか・・・そう言えばあいつも分艦隊に参加していたんだっけ

「パエッタから・・・？わかった。出して。」

数秒後、パエッタの姿がモニターに移った。

『よう、無事か？』

「この通り、ピンピンしてるわよ・・・今のところはね」

『確かに、「今のところは」だな。で、本題に入るが序列に従って俺が分艦隊の残存部隊を指揮するんだが、お前は前衛部隊を指揮してくれないか？』

「私が？」

『お前以前同じようなことやっただろ。』

「おk、その代わり帰ったら何か奢りなさいよ。」

『わかった。生き残ったら何か奢るよ。じゃあ前半分は任せた』

「じゃね〜」

そういうとリーナは手を振りながら通信を切った。

暫くして、数人の中佐などの階級をつけた士官が通信モニターに現れた。

『駆逐艦エルム？艦長のハルゼー少佐です。第228駆逐隊14隻は閣下の指揮下に入ります。』

『戦艦オスラービア艦長のオルデンドルフ中佐です。同じく第六戦艦戦隊十隻は閣下の指揮下に入ります。』

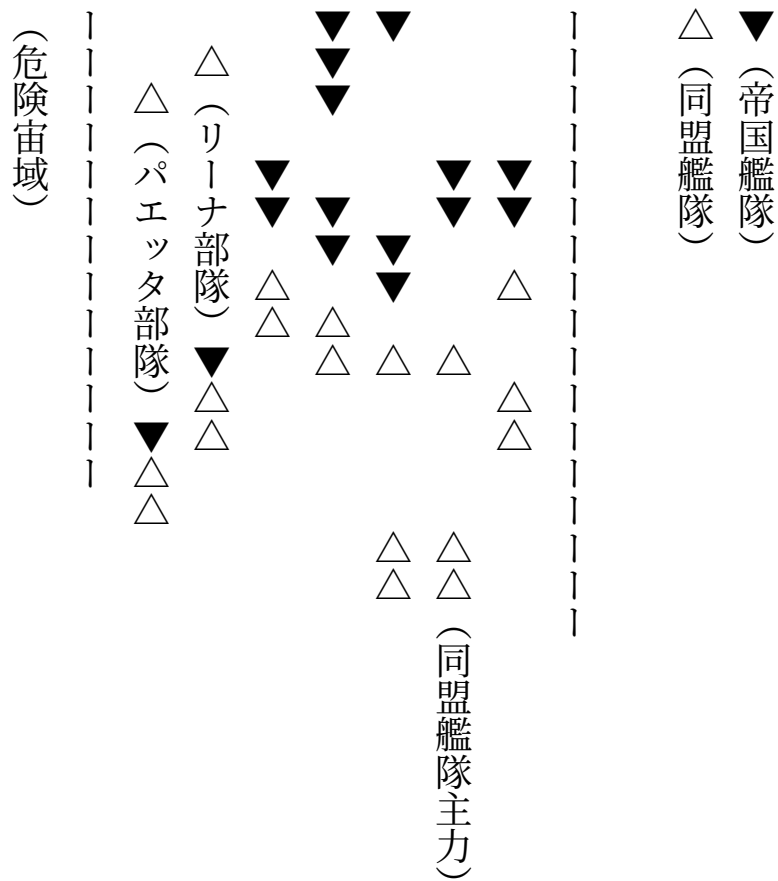
その他何人かの指揮官がモニターに現れ、私の指揮する艦艇は一気に四百隻余りにまで増えることになった。

「そんなわけで私が前衛部隊を指揮する。全艦、右舷回頭し敵を迎撃せよ！」

リーナの命令をうけ、四百隻の艦艇がいっせいに右旋回をしつつ、ビームの矢を放ちながら進撃してきた帝国軍の前面に立ちふさがった。

この一撃で、一時的に帝国艦隊は進撃を停止せざるを得なくなってしまった。

図にするとこんな感じ



さて、前衛を受けたのはいいけどどうしようかな？
とりあえずヤンのパクリで何とかしようかしら。
ある程度の時間は耐えられるでしょう

「装甲の厚い戦艦や空母で前面を固めて防御壁を作り、巡洋艦以下の艦艇はその隙間から反撃せよ」

リーナの採ったヤン印の防御戦術は高い威力を発揮した。
防御戦闘は基本的に消耗戦となる。

だがこの防御壁と、パエッタ戦隊からの支援を受けている以上、あの程度の攻撃を耐えしのごことが出来た。

だが敵艦隊の数は圧倒的であり、時間と共に味方艦隊の戦力はそぎ取られていった。

「こちら第44巡洋艦戦隊、戦線を維持できません」

「巡洋艦アフロディテ？撃沈」

「戦艦レヴィトザン大破！」

「引くな、後ろは危険宙域だ！後ろに下がったら死ぬぞ」
パエッタが必死に将兵を叱咤し、

「下がるな、踏みとどまりなさい！下がる艦はミルキーウェイの主砲で沈めてあげるわ！」

リーナからの脅迫としか言えない様な檄が飛ぶ

リーナとパエッタに引くことは許されなかった。

ここで引いても後ろには回廊の重力面が存在しているのだ。

そこに入ったら「死」あるのみ

つまりは背水の陣というわけだ。

だが時間と共に艦隊は消耗を重ねて行った。

気が付くと、防御戦闘の開始から既に5時間が経過していた。

だが現状は変わらず、むしろ敵は増えていった。

『ええい、次から次ときりが無い！』

スプレイグがたまらず叫んだ。

「・・・味方はどうなっているのかしら」

リーナはモニターを眺めながらつぶやいた。
敵艦隊は休み無い波状攻撃を仕掛けることによってこちらを消耗させている。

既に自分の戦隊も百隻を切っている現状ではこれ以上戦線を維持することは出来ないだろう。

このまま味方艦隊が助けに来てくれなかったら、リーナたちは一隻残らず宇宙の塵となって消え、少し前に極太ビームで消し飛んだ戦友達の所に行くことになりかねない。

で、14時ごろになると敵の砲火はさらに過密になった。

『11時方向から敵の第十二波接近!』

「戦艦部隊で応戦しなさい!」

『2時方向からも』

「駆逐戦隊を回すわ、ハルゼー少佐に連絡を入れて!後パエツタにも増援要請を!」

『天頂方向からも敵が来ます!』

「グ・・・巡洋艦戦隊の残り和本艦で相手する」

『おそらく総攻撃にでたのでしょう・・・不味いですな』
ミツチャーが額の汗を拭いながら他人事のように言った。

「エエ、不味いわよ。クソツ私はSでMじゃないのにどうしてこん

な仕打ち受けなきゃならないのよ!？」

リーナはたまらず叫んだ。

既にリーナのイライラは有頂天だったりする。

だが叫んだところで戦局が好転するわけではない。
そして止めが来た

『10時方向から敵接近、数およそ300!』

「H A H A H A H A・・・マジ?とりあえず球形陣をしいて戦力を
集結させる。急げ!」

エレクトリック部隊は敵からの猛烈な攻撃を防ぎながら陣形の再転
換を成功させた。

だが敵の攻撃は壮絶を極めた。
敵艦隊からの攻撃は激しく、リーナは攻撃を支えるので手一杯とな
った。

艦隊は球形陣を採ったが、戦力を消耗している上に包囲されている
現状では余り効果が無いと思われた。

ヤバイなと冷や汗を流しているとパエッタから通信が入り

『リーナ、残念ながら俺達は今敵の完全包囲下にある。ちなみに突
破は無理そうだ』

パエッタが青い顔で言ってきた。

そろそろ潮時かな?

全部見たわけじゃないけど原作じゃ確かパエッタは結構後のほうま

で「生き残るはずなんだがなあ・・・死にたくないし降伏するか

そう考えたリーナが敵との通信回線を開くように命じようとした時いきなり左側面の敵が一気に爆発した

『て、敵左翼部隊・・・全滅！全滅です！』

なんぞ！？いったい何が起こったんだ！？

リーナは余りの突然のことに思考が追いつかなかった。
その答えはすぐに来た

『味方です！味方の来援です！た・・・助かった』

通信員の言葉はこれまでずっと孤独な戦いを強いられた艦隊将兵全員の気持ちを代弁したものであった。

『何とか・・・助かりましたな』

ミツチャーも安堵の溜息をついた。

光学モニターの先には自分達を救出しに向かってきた艦隊の姿があった。

二百～三百隻の艦隊を有機的に結合させて倍以上の敵を押している姿はリーナたちの目にはとても勇ましく見えた。

『無事かね？パエッタ大佐、エレクトリック大佐。』

その巧妙だが猛烈な攻撃を眺めていると不意に通信モニターに少将

の階級章をつけた恰幅の良い中年男の姿が映った。

第12艦隊の副指令であるロボス少将だった。

未来の宇宙艦隊司令長官になる男だ。

「助かりました・・・ありがとうございます。」

『礼を言われる筋合いは無いさ、私のところの作戦参謀がこちらに急行するようにと進言してね・・・』

そう言っていた彼のすぐ後ろには頭をかいている幼馴染の姿があった。

アイツ・・・

彼の姿を認めたリーナは少しだけ安心した。

『さて、安心してもらって助けに来た甲斐があったというものだが、残念ながらまだ危機は去ってはおらん。早速だが撤退を開始しようと思う。』

ロボスは厳然として口調でいった。

そうだな、まだ危機は去ってはいない。

リーナもパエッタも彼の一言で気を引き締めた。

「了解しました。直ちに撤退行動に移ります。」

リーナたちはすばやく敬礼をして行動をとり始めた。

「全艦、密集して後退しつつ残ったビームとミサイルを敵に叩き付けなさい！」

無事な艦艇は残っていたビームやミサイルを撃ちまくりながら味方艦隊の方向に後退を開始した。

敵も追撃を加えることは出来ず、自然にずるずると後退を開始していった。

そして17時ごろ、ようやく残存部隊は後方に到着し、修理と負傷者の後送を受けることが出来るようになった。

リーナたちは艦隊の再編作業などに負われることになった。

そしてそれから数時間後、キンメル元帥は全艦隊に退却命令を出した。

宇宙暦779年6月25日のことであった。

『ふむ、貴官らの報告は読ませてもらった。つまり貴官は要塞主砲が発射されるのを予期していたと言うわけかな？』

「そうなる可能性は大いにありました。」

私とパエツタは総参謀長のマクモリス大将の問責を受けていた

『突入艦隊二千が三百隻そこにまで減り、さらに戦闘可能艦艇

はその半分以下とは・・・やられたな』

「もう少し早く味方が来ればその損害は抑えられたでしょう。」

『ちょ、おま・・・』

『・・・なるほどな。ご苦労だった。退室してよろしい』

「・・・ハッ」

敬礼して出て行こうとしたら、引き止める声が聞こえた。

『アア・・・ちょっと待った。そう言えば、司令部が全滅した後指揮を採ったのは貴官らだったな』

「はい」

『そうです。』

『なるほど・・・ご苦労だったエレクトリック「准将」、パエッタ「准将」。下がってよろしい』

「生き残ったみたいね、パエッタ「提督」。」

『ああ、今回もしぶとくな。エレクトリック「提督」』

参謀長の部屋を出ると幼馴染とロボス提督がニヤニヤした顔で待っていた。

『よう、提督方、おつかれさ・・・「助けに来るのが遅い！」・・・ガハッ!？」』

少しイラッとしたのでとりあえず顔面にパンチを食らわせてやった。やっぱりこうでないと

『おいおい、いきなりやりすぎだと思うが?』

ロボスがたしなめる

パエツタは免疫が出来ていたのでどうってことは無いようだ。

『コイツはこのくらいやらないと気がすまないのですよ』

『士官学校の魔王と呼ばれた君らしいな。だが少し酷いと思うのだが』

「死に掛けた人間の行う行為だと思いますよ」

シレッというリーナ

『何でそうなるんだよ!?!?』

即座に復活した幼馴染が問いただした

「助けに来るのが遅かったから。あんたはもっと早く具申しなさいよ」

即答する私

『ヒデエッ』

『ハハハ・・・さて、私も所用があるのでな。おいとまさせてもらうよ』

ロボスはそう言うと、参謀長室へと入っていった。

何でこんな有能な人があんなのになってしまったんだ・・・？
リーナが内心首をかしげていると

『まあ何はともあれ生き残ったんだ。リーナ、ハイネセンに付いたら約束通り何かおごるよ。』

パエッタが笑顔で言った。
んゝ何がいいかしらねえ？・・・アッ

「じゃあハイネセン中央駅にある喫茶店のスペシャル特大パフェで
あそこの値段がちよっと張るけど大きくて美味しいのよねゝ

『アア・・・わかったよ。』

パエッタは顔を引きつらせながら答えた。

「じゃあ折角だみんな生き残ったんだし、酒でも飲みましょう？私の船にいい酒が大量に隠してあるのよ」

『そうだな、いただくよ』

『マジで？』

そういうわけで私達は廊下を歩いていった。

船は進む。
生き残った者たちを乗せて

光色トウルハンマー 下（後書き）

読者の皆様こんにちは

今回は難産だったのですが、でもその割りにいつものような感じはかなり駄文くさくなっていました（涙）

今回は有能なロボス提督を出してみました。

40代までの彼はきわめて優秀な勇将だと原作にも書かれていたのですが、それっぽく書いてみましたが、なかなか上手く書けず、結局こんな感じになってしまいました。

今回はハイネセンに戻ったあたりのことを書こうと思いますが、例によって全く考えていません。

出来るだけ早く纏めようと思っています。

批判や感想がございましたら遠慮なく投稿してください。

ハインセンポリスの怪事件

前回のあらすじ

降伏しようとしたら、助けが来た。

以上。

ブラックマーケットや犯罪者、違法ドラッグの売人が集まるとある
路地裏・・・

そこで一人の銀髪の女性がガラの悪い男達に取り囲まれていた。

「ここは女の子が来るようなところじゃねえんだよ」

「姉ちゃんいい体してんじゃねえか？今なら高く買ってやるぜ？」

「胸があつたらもう少し高く売れるんだがな・・・アボック！？」
胸のことを言った途端、女は男の顔面にストレートを入れた。

男は血を吐きながら仰向けに倒れて気絶した。

「黙れや下種が・・・殴るわよ？」

「もう殴っているだろ！？」

「~~~~~♪」

別の男が叫んだが女は無視して口笛を吹いている。

「いきなり何しやがる!？」

「私の心を痛く傷つけたゲロ以下の汚物を潰しただけなんだけど？」

激昂する男達に向かって女はさらりと言った。

「まあいい、ヤッチマエッ！」

「小娘が・・・後悔するなよ？」

そう言って男達は一斉に女のほうに向かっていった・・・

数分後・・・

「ウウ・・・ッ」

「い・・・命だけは、命だけは助けてくれエエ・・・」

50人以上の男達が路地裏を埋め尽くすように倒れているなか、一人の女が立っていた。

女はいかにも楽しそうに微笑んでいた。

「た・・・助けて・・・。」

フルフルと女の足に片手を付けた男に女は鼻歌を歌うように

「そう・・・なら命『だけ』は助けてあげるわ？」

といつてにっこりと笑った。

『宇宙暦779年11月3日、ハイネセンポリスの路地裏で50人以上の男性が全裸で寝ているのを近くを通りかかった通行人が発見し、駆けつけた警察が彼らを猥褻物陳列罪によって逮捕、連行していきました。彼らはその際「白髪の女が犯人だ！俺達は何も悪くない！」と喚いていたそうです。』

11月4日のハイネセンの朝のニュースより抜粋。

宇宙暦779年11月4日 ハイネセン

リーナは1ヶ月の休暇を貰い、久方ぶりにハイネセンの実家に帰ってきた。

「ただいま」

『あ、リーナオバちゃんだ！』

『オバちゃん！お土産お土産！』

玄関を開けると2人の小さな子供がパタパタと駆けてきた。

一人は水色の髪に紅と青のオッドアイの娘と碧眼に栗色の髪をした少女達だった。

3年位前に結婚したエミリー姉さんが生んだ子達だ。

家に帰ると必ずお土産をたかられる。

「あら、メデイにランじゃない、二人ともいい子にしてた？」

そう言って頭をなでながらケーキの入った箱を手渡した。

母親のエミリーからは余り甘やかさないようにと言われているのだが、つつい甘やかしてしまうのだ。

『あら、リーナ。帰ってたの？』

「ただいま姉さん。今帰った所よ」

『アッ、リーナァ、甘やかさないように言っているのに』

「ゴメンゴメン、ついやってしまった」

『ハア・・・紅茶入るから待ってて』

溜息混じりにエミリーは台所へと向かった。

ソファアに座って仲良く遊んでいる子供達を眺めながら紅茶を飲んでいると、唐突にエミリーが口を開いた

『・・・所でリーナ、貴方結婚はしないの？』

「ブフォエッ・・・ゲホッ何よ突然・・・？」

余りの予想外の内容に思わずリーナは紅茶を吹き出してしまった。

『汚いわね、イヤね？だって・・・あなたもう29でしょ？そろ

そろ身持ちを固めたほうがいいんじゃないかしら?』

「結婚なんて面倒くさいじゃない? 相手もないしね」

『またそんなこと言って・・・幼馴染のデイヨーなんてどう?』

「あ? デイヨー!? 何であいつが出てくるのよ?」

『いつも良く遊んでたでしょ? それに学生時代には告白までして
たみたいじゃない?』

「来るたびに振っていたわよ!」

『でも諦めてないみたいじゃない? ほかに相手も来ないわけだし
い加減に観念して付き合っちゃえ?』

「・・・五月蠅いわねえ」

『オバちゃんけっこうんするのー?』

『るのー?』

メデイとランが尋ねた。

嘘を知らない純粹な瞳で

「う、ううん。違うのよ。それよりもホラッ、夕飯はどこか食べに
行かない? いい店があるんだけど」

リーナは慌てて否定し、話題を別の方向に振った。
その時のリーナの顔はなぜか真っ赤だった。

それでも尚しつこく質問をしている少女達と必死に誤魔化そうとしているリーナをエミリーは微笑みながら眺めていた。

それから数週間があったという間に経過し、第4次イゼルローン攻防戦で准将に昇進したリーナは辺境のクレナイカ星系にある「シディ・レゼー後方基地」の司令官に任命されることになってしまった。

この星は水や酸素などがあり一応人間がすむことは出来るのだが、砂漠を中心とした不毛な地域で、鉱物資源にも恵まれているとは言いがたい土地であった。

それでも、回廊が近くにあったので、現地に駐留する両軍の間でたまに小競り合いが行われていたりする。

「なんで私が基地司令になるの!? 私は航海屋なんだぞ?」

『そ・・・そんなに怒らないで下さい・・・頼みますから』

人事局員が怯えながら言った。

地上勤務でももっとマシな所があるだろう!? 後方のボルハン星系とかジャムシード星系とか!?

『上層部からの命令なんです、我々ではどうしようもないんです!』

局員は涙目で言った。

まあここで下っ端に怒鳴った所で大した利益も無い。

ここは大人しく従うか・・・。

と言うわけで、私は官舎に帰って新しい赴任先への準備をすることにした。

「自宅」

えーと、エロゲは入れた。同人誌もオツケー、白衣も仕立て直した。
・・・あとは。

こんな感じでトランクに必要なものを入れてるとニトリ姉さんがやってきた。

どうも最近、アケ・・・何とかと言う旗艦型戦艦の改造をやったそうなのだが、余りの魔改造ぶりの所為でかえって素人乗員では扱えないし、そもそも危ないと言われてしましく、辺境艦隊への補充に使われてしまったそうだ。

おかげで現在では軍最凶のマッドサイエンティストと呼ばれているらしい。

「リーナ、いる？」

「姉さんおひさー」

『頼まれていた傘を持ってきたわよ』

そういうと、ニトリ姉さんは白い日傘を差し出した。

（原始人と戦った後、傘の骨にひびが入っていたのでニトリに修理をお願いしていた。）

『頼まれたとおり、布は防刃布、もちろんUVカットは抜群。骨はいつもの特殊合金の強度を強化！これなら白兵戦でも十分に渡り合えるはず。あと、秘密兵器も付けといたよ』

流石に軍最凶の科学者の名は伊達じゃないみたいね。

「ありがとう姉さん、これがアレがまだ大丈夫だと思うわ。」

「まあ、あんたなら素手でも十分恐ろしいと思うけど・・・折角だから餞別を渡しておくわ。」

そう言うときトリー姉さんはジュミラルンケースを差し出した。

「・・・中身は？」

『開けてみりゃ分かるさ』

言われるままにあけてみると一丁の回転式拳銃が会った。

「・・・？」

何だコリヤ？と首をかしげているときトリーは口を開いた。

「コイツはS&W M500。その昔地球で生産された火薬式拳銃さ。ハイネセンの骨董屋で見つけた。」

「・・・なんで火薬式拳銃を・・・？」

『ゼッフル粒子はレーザーの温度で発火する。でもTNT火薬程度

なら発火はしない。』

「でも装甲服は貫けないんじゃない？」

『そのために特殊な弾丸を開発したわ。銃身には貫通力を可能な限りあげる処理をしたし、弾丸も特殊な合金を使用したわ。50メートル以内なら装甲服を貫くことが出来るわ。ただし、反動が元の3倍とものすごく強いから気をつけてね？クイックローターを付けておいたし、弾も50発あるわ。』

「でもなんでこんな者を・・・」

『あんたが持ってきた修理代が多すぎたし、折角と思ってやったんだけど・・・いったいどうしたの？三百万ディナールなんて大金？』

「お友達が快く出してくれたのよ。」

につこりと笑って緑茶の入ったカップに口を付けた。

「・・・まあ、余り深くは考えないようにするわ。」

そうそう、世の中には知らなくて良い事もあるのよニトリー姉さん。

宇宙暦799年12月8日 ハイネセン宇宙港

そんなこんなで、いよいよ出発の日が来た。

見送りには幼馴染のデイヨーにパエッタ。

それにエミリー姉さんと娘のメディとランの二人が着てくれた。

「じゃあちよつと逝って来るわね・・・。」

『ああ、元気だな』

『おばちゃんお土産買ってきてね』

『体に気をつけてね。』

『土産楽しみにしているわよ。』

「ええ、たっぷり持って帰ってあげるわ（砂と石をね）」

私はそう言ってシャトルに乗り込んだ。

ハインセンポリスの怪事件（後書き）

読者の皆様こんにちは、作者です。

いつも以上に短い上にいつも以上に駄文臭くなってしまった・・・
orz

最初のネタは闇の皇子様の『下僕や奴隷から資金を徴収』のネタをアレンジさせていただきました。

感謝です。上手く表現できませんでした・・・。

幼馴染の名前はデイヨーにしました。

モデルは太平洋戦争時のアメリカ海軍のデイヨー提督です。

ご意見や感想がございましたら、遠慮なく投稿してください。
お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7632p/>

宙は白銀に輝きて

2011年3月6日06時00分発行